の話相手としては、互に面白かつたものと思ふ。

併し是れのみではない。一方には、相當信頼すべき點のあつた事は、清少の附言した所であり、且其の藏人頭に補せられたのは、俊賢の推擧に由るもので、當時行成はまだ備後介で地下であつたから、一條院は、地下の者は如何であらうかと仰せられた時に、俊賢は、いとやむごとなき者に候ふ。地下など思し憚らせ給ふまじ。行末にもおほやけに何事にも堪へたる者になむ。かくやうなる人を御覽じわかぬは、世の爲あしき事に侍り」（大鏡、伊尹傳）と

ただ返しを、いみじう赤き薄様に、みづからもてまうで來ぬ下部は、いとれいたんなりとなむ見ゆる」とて、めでたき紅梅につけて奉るを、即ちおはしまして、下部さぶらふ」と宣へば、出でたるに、さやうのものぞ、歌詠しておこせ給へると思ひつるに、びびしくもいひたりつるかな。女のすこし我はと思ひたるは、歌詠みがましくぞある。さらぬこそ語らひよけれ。まろなどに、さる事いはむ人は、却りて無心ならむかし」と宣ふ。「則光、なりやすなど、笑ひて止みにし事を、うへの御前に、人人いと多かりけるに、語り申したまひければ、『いとよくいひたる』となむ宣はせし」と、人の語りし。これこそ見苦しき我ぼめどもなれかし。

語釋　○梅の花の云々　獻上物や贈物や、法會の時の捧物などから始まつて、消息文などをも、四季折々の花草の枝（造枝を用ひる時もある）につける事が、此の時代の風俗で、而も料紙と花草との調和を取る事は、源氏河海抄、野分に「大方文を同色の木草に付くる、定まれる事なり」といつた通りである。

○餅餻　和名抄、飲食部の飯餅類中に、餅餻を擧げ、揚氏漢語抄を引いて、裹餅中納煮、合餅等

いつてお勸めしたので、遂になされたと傳へる事をも、考ふべきである。殊に其の能書と來ては、當時無雙で、宮中でも餘程重んぜられて居たものと見え、此の時の書いたものは、中宮がお取りになつたのだし、夜をこめて」の歌の前後に於ける消息の中、初の（は隆圓僧都（中宮の御弟）が額までついて取つたと云ひ、後後のは、中宮がお取りになつたといふではないか。（一一七段）又此の後、後一條院の御代に、殿上の人々が扇をこしらへてさし上げた時、人々は骨に蒔繪をし、或は金銀沈紫檀の骨にすぢを入れ、

子、並雜菜二而方截」と見え、餻は玉篇に「看也」とあつて、卵子や野菜を餅で包んだもの。國書には多く餻を餻に作つてゐる。前段に二月（十一日）太政官廳で列見の公事ある事を述べた（定考と書いたのは、作者の思ひちがひで、定考は八月に行はれる）が、是等の公事の場合の宴席で、二献粉熟を居ゑ、三献飯汁を居ゑ、五六巡の後、餅餻を居ゑる事が、江家次第卷五の其の條に見え、西宮記、北山抄等また同樣で、糎餻に於ける聰明と同じく、此の公事につきものの御料理と見える。それで之を行成が取つて置いて、其の翌日にこんないたづらをしたものであらう。○立文　文を書いた色紙を、横に三分一よりは少し狹い程に折り、更に之を三つづゝに折つて行き、殘りの一部分と合せて丁度十に折る。（重ねの色紙を用ひる時は、下の紙を少しずらして、ちがつた色の見える樣にする）さて此の折つた紙の上下を、おの〳〵一寸程づゝ折る。是れが即ち立文で、其の上を別の紙で包んで、上書をする事があつて、之を禮紙といふ。又此の折つた紙を、立てたまゝでなく、引き結ぶ事がある。是れが結び文といふ略式のもので、艶書とか手輕な場合とかには、多く之を用ひた。○解文　單に「解」とも云ふ。内外の諸司から、太政官もしくは其の所管の官衙に差出す公文書で、其の實例は朝野群載に多く見えるが、今同書卷十五、陰陽寮の申請補曆得業生事の解文を左に引いて置く。

學生正六位上某姓朝臣某名

讀書　長……　開……

右得從四位上行主計頭兼縫殿頭曆博士但馬權守賀茂朝臣家榮等某月某日解狀、偽、件某情操聰敏、勤學匪懈、望請、補得業生某姓某名任　陰陽師之替將令遂其業志寮依解狀申送如件、以解

彫刻を施し、えもいはぬ紙どもに、人のなべて知らぬ歌や詩や、又は六十餘國の歌枕で、名のあがつた所々を書いて參らせたが、此の行成は、骨の漆だけを面白く塗つて、黄の唐紙の下繪の面白く薄つすらとしてゐるのに、表の方には樂府を立派に楷書で書き、裏には草で立派にかへて書いたのを奉つたから、帝は打返し〳〵御覽になり、いみじき實と思し召して御手箱におしまひになつた。それにひきかへ、外の扇は唯御覽になり興ぜられたのみで、終つたとの逸話も傳つてゐる。是れは能書に加へて今一つ、此の人が獨創的で月並を嫌つたといふ例話にもなるので、後一條院御幼少の頃、人々に御玩具を參らせよと仰せられた時、人々は樣々金銀などで心を盡し、風流をし出でゝ持つて參つたが、行成は獨樂に村濃の緒をつけて奉つたら、是れが非常に帝の御氣に入つて、外の物はしまひこめられてしまつた、といふ如き事もある。（以上、大鏡、伊尹傳）

歌は大鏡にいふ如く、不得手でもあつたらうが、實は當時月並になりきつた歌での贈答などは、あまり蟲が好かなかつたらしい。是れは淸少も同樣であつて、

年　月　日　　正六位上行少屬大中臣朝臣

從四位上行主計頭兼縫殿頭曆博士但馬權守賀茂朝臣　允屬昔連署

正五位下……　從五位上行權助……

○美麻那成行　わざとこんな變名をしたので、美麻那は何からの思ひ付かわからぬが、上代に於ける歸化人を思はしめて滑稽味があり、成行は實名を轉倒したものたる事いふまでもない。○畫はかたちわろしとて　葛城の神の故事。（八十六頁參照）○惟仲　平氏。多年太政官の辨官を務めて官內の慣例に明るいから、問へと仰せられた。○ことうるはしうて　中宮の御召しと思つて、形を整へ、あらたまつてやつて來た。○辨少納言　太政官の判官（三等官）で、對にいひ、外記、史が主典（四等官）で、其の下につく。少納言は三人だが、辨は左右おの〳〵左中少の三階あり、中辨にのみ權官があつて、總稱して七辨ともいつた。○する事やある　祿でもやるのかと、勝手がわからぬから尋ねた。「はかなき藥玉卯槌などもてありく者にも、必ず取らすべし」（二二段）と書いた作者である。行成はふざけてやつた仕事だが、使には使として定まつた扱はせねばならぬから。○政官　太政官の官員の略稱。特に外記史を云ふ。こゝはそれ。○れいたん　冷淡の字音。春註本には「れいたう」とあり、岩崎美隆の私記に、中昔の記錄に、事が打合はないで不興なのを、冷淡なりと書いたのが多く見える。さればこゝもそれで、自ら來べきが、さもあらぬは、不興なりといふ意であらうか。レイタンの音便をレイタウといふのは、林檎をリンゴウ、龍膽をリンダウといふと同じだといつてゐて、是れでもよいが、古本にはレイタンとあるから、寧ろ是れに隨ひ、ベイタンと音の通ふのを利したものと、見る方がおもしろいと思ふ。○びゝしくも　美々の音語を形容詞化したもの。立派に、又はコツピドクなどの意。○則光なりやす　則光は藏人左衞門尉で、作者の夫とか義兄とかいはれた人。其の歌嫌ひの事は、七二段に見える。なりやすは傳不詳。○うへの御前　主上の御前。春註本、此の一句を「殿の前に」に作り、道隆の事と解いてゐるが、道隆は長德元年四月に薨じたので、今はなき人である。

通釋　「頭の辨の所からです」といつて、主殿司が繪などの樣なものを、白い色紙に包んで、梅の花の立派に咲いたのに附けて、持つて來たので、繪だらうかと思つて、急いで取り入れて見ると、餅餻と云ふものを、二つ並べて包んだのであつた。添へた立文に、公文書の樣に書いて、「進上べいたん一つゝみ、例によりて進上如件。少納言殿に」と書いて、月日を書いて、美麻那成行として、其の奧に「此の男は、自分であがらうと思ふのだが、畫は貌が醜いといふので、あがらぬのです」と、ひどく面白い風にお書きになつてある。宮樣の御前に參つて、御目に懸けた所が、宮樣は「まア立派にお書きになつてあるネ。面白くした」とお譽めになつて、御文は取つておしまひになつた。あとで私は獨言に、「此の返事はどうしたらよいだらうか。此の餅餻を持つて來る者には、物でもやるものだらうか。知つて居る人もあればよいに」といふのを、宮樣がお聞きになつて、「惟仲の聲がした。呼んで問へよ」と、仰せられるから、端に出て、「左大辨にお話がある」と、侍に取り次がせていはせた所が、惟仲は大層あらたまつてやつて來られた。それで私は、いゝえ、お上の御用ではありませぬ。ちよつとした私事です。實は餅餻をもらつたのですが、若しあの辨や少納言などの所へ、こんな物を持つて來る下部には、祿でもやるのですか」と尋ねたら、惟仲は「そんな事もありませぬ。唯受け取つて置いて、食ふのみです。何しにお尋ねになるのですか。或は政官仲間からおもらひになつたのですか」といふから、「どういたしまして、さうではないのですけれども」とお答

其の事は草子中にも見え、二人の氣風には類似の點がある。是れが、女はおのれを悦ぶ者の爲に顔づくりす、士はおのれを知れる人の爲に死ぬ」(四五段)とまで、意氣投合した所以でもあらう。だが、何といつても、當時の宮廷に於ける趣味の第一位にあつた。歌を忌避したり、經よみ歌うたひなどしないでは、女房仲間にもてる筈はないので、「けすまじ」と、一口に排斥されてしまつたのも止むを得ぬ。(以上、四五段、参照)

へをした。

外にはなにもせず、唯返事をひどく赤い薄様に、自分で持つてやつて來ぬ下部は、大層不都合だと思はれる」と書いて、立派な紅梅の枝に付けて、上げた所が、直にお出でになつて、下部が參りました」といはれるから、出てお會ひしたらば、あんな物は、歌を詠んでおよこしになつたのかと思つたが、手嚴しくいつたものですネ。女の少し得意でゐる者は、何かの折には、歌を詠まうとかかる。さうせぬのが話しよい。私などに歌を詠みかける樣な人は、却つて殺風景であらうワ」とおつしやる。「それで歌嫌ひの則光、なりやすなども、我が意を得たりと笑つて濟んだ事の顚末を、主上の御前に人々が大層多かつた時に、或方が語り申された所が、主上も『大層うまくいつた』と仰せられた」と、それを聞いた或人が、私に話してくれました。是れこそ見苦しい自讃でありますワ。

百十八段

(一)　年は長保元年らしく、時は五月の闇夜、所は職の御曹司。殿上人達に六位の藏人も交つて、清涼殿に於ける當直の折からの退屈しのぎ、わざ〳〵職まで女房達をからかひに行く。携へた呉竹の一枝、いづれ問題の種にはと思つたらうが、全く豫期以上、清少により、頭のよい所を見せて、輕くあしらはれてしまつたので、殿上人達は驚いて退却、徒に作者をして名を爲さしめ了つた。而して此の音頭取が、行成であつた事はいふまでもなからう。

(二)　次に出した九一段は、まことに短いものであるが、此の段とは全く類が同じいから併せ載せる事にした。是等に比しては、中宮から「少納言よ、香爐峯の雪はいかならむ」と仰せかけられて御格子あげさせて、御簾を高く捲き上げたのは、(二五六段)作者に取つては、更に樂な御發題、應じ易い解答であつた。

(三)　此の段は、卷首の繪卷に出てゐるから、參照せられよ。

五月ばかり、月も無くいと暗き夜、「女房やさぶらひ給ふ」と、聲聲していへば、「宮出でて見よ。例ならずいふは誰そ」と仰せらるれば、出でて、「清こは誰そ。おどろおどろしう際やかなるは」といふに、物もいはで、御簾をもたげて、そよろとさし入るるは、呉竹の枝なりけり。「清おい。この君にこそ」といひたるを聞きて、「いざや、これ殿上に行きて語らむ」とて、式部卿の宮の源中將、六位どもなどありけるは去ぬ。頭辨はとまり給ひて、「怪しく去ぬる者どもかな。御前の竹を折りて、歌詠まむとしつるを、『職に參りて、同じくは女房など呼び出でてを』といひて來つるを、呉竹の名をいと疾くいはれて、去ぬるこそをかしけれ。たれが教を知りて、人のなべて知るべくもあらぬ事をば

【參考】　吐嗟の名答おし寄せた殿上人達をアッといはせて置きながら、「竹の名とも知らぬものを」と、空とぼけた作者の態度、本當に憎らしい程の上出來だが、型朝中宮の御たづねに對しても、是れで一貫する所、愈出でゝ愈おもしろく、而して中宮の「取りなすとても」と、いひさして微笑されたあたりは、如何にも優雅なお人柄が髣髴とし、同時に「誰が事をも、殿上人譽め

けりと聞かせ給ふをば、さいはるる人を、喜ばせ給ふもなかし」といつた結末の一句は、其の御美質を傳へて、感に堪へざらしめる。

ところで、清涼殿の東庭の竹臺であるが、石清水の臨時祭（三月中の午日）の試樂には、之をば背景に舞樂が奏せられたので、一條院の御時、此の臨時祭の試樂に、實方中將が遲參した爲に、挿頭の花を賜はらず、遂に舞に加はる事となつたから、中將は竹臺の下に進み寄り、呉竹の枝を折つて之を挿したので、優美の由、滿座感歎して、是れから後、試樂の挿頭には、永く呉竹いふぞ」など宣へば、「竹の名とも知らぬものを、なま妬しとや思しつらむ」といへば、「まことぞ。え知らじ」など宣ふ。まめ事などいひ合せて居給へるに、「この君と稱す」といふ詩を誦じて、又集まり來たれば、「殿上にていひ期しつる本意もなくては、などかへり給ひぬるぞ。いと怪しくこそありつれ」と宣へば、「さる事には、何のいらへをかせむ。いとなかなかならむ。殿上にてもいひののしりつれば、上も聞し召して、興ぜさせ給ひつる」と語る。辨もろ共に、返す返す同じ事を誦じて、いとをかしがれば、人人出でて見る。取り取りに物どもいひかはして歸るとて、なほおなじ事を諸聲に誦じて、左衞門の陣に入るまで聞ゆ。つとめて、いと疾く少納言の命婦といふが、御文參らせたるに、この事を啓したれば、下なるを召して、「さる事やありし」と問はせ給へば、「知らず。何とも思はでいひ出で侍りしを、行成の朝臣の取り成したるにや侍らむ」と申せば、「取り成すとてもと打笑ませ給へり。誰が事をも、殿上人譽めけりと聞かせ給ふをば、さいはるる人を喜ばせ給ふもをかし。

語釋　○おどろ〳〵し　オドロを重ねて、シク活用の形容詞としたもの。オドロク（驚）と同原の語。仰々し、仰山な、など譯する。○そよろと　ゴソリといふ音の形容。前に烏帽子の物に障る音をも、此の語で形容してゐる。（二四段）○呉竹　和名抄、草木部、竹類に、笄竹を擧げ、音甘、漢語抄云、呉竹也、和語云久禮太計と註し、又似篁而、下節茂葉者也と云つてをり、徒然草に、呉竹は葉細く、河竹は葉廣し。御溝に近きは河竹、仁壽殿の方によりて植ゑられたるは、呉竹なり」（二〇〇段）ともあり、古今要覽稿には、漢竹の一種で、細小なもの。今またハチクと云ふと見える。清涼殿の東庭に、架を構へ、呉竹、河竹各一叢づゝを植ゑられてあるので、之を竹臺とも稱した。序に述べるが、河竹は「哀なるもの」の段に「河竹の風に吹かれたる夕暮、曉に目覺したる」（一〇二段）とも書き、和名抄には、箬竹を充て、古今要覽稿には、古歌にナヨ竹と云ひ、今ヲンナ竹、メ竹、ミカマ竹、ニガ竹と云ふのは是れだと解してゐる。○おいこの君　オイはオに同じく、應へる時にも用ひるが、こゝはふと驚いた時に發する聲で、オヤと同意の感動詞。「この君」は竹の異名で、王子猷の故事から出た。和漢朗詠集、雜、竹の條に、「晉騎兵參軍王子猷、栽稱此君、唐太子賓客白樂天、愛爲吾友」の句あり、作者は藤原篤茂、多夜守庚申同賦修竹冬青應教詩の序文で、全文は本朝文粹、卷十一に見える。又王徽之に關する故事は、晉書、王徽之傳に、「徽之字子猷、（中略）。嘗寄居空宅中便令種竹、或問其故、徽之但嘯詠指竹曰、何可一日無此君邪」と見の枝を用ひる事になつたと、云ひ、（一二三段、江家次第卷六の其の條）又同じ院の御時、清涼殿で御酒宴のあつた時、左大臣が此の竹臺の筍を拔いて石灰壇で燒いて强ひ申されたら、度々聞こし召したと云ふ如き事もあつて（以上、事談第一、古相當風流な說話を傳へてゐる。）

え、騎兵參軍は其の官であつた。○式部卿の宮の源中將　此の源中將は、古來の傍註に、頼定とある人で、式部卿爲平親王の二男。公卿補任に據れば、長德四年十月二十二日に、左近中將に任じた人であるから、其の翌年五月の事と推定してよいと思ふ。此の句、春註本には、「中將、新中將」の二人になつて居り、評釋には、「中將」を傳不詳とし、「新中將」を、頼定と實成とが同時に左右の中將に任じた人であるから、どちらかの中に相違ないといつてあるが、八月から翌年の五月まで、約九ケ月も經てゐるのに、「新」の語を冠するいはれもないから、是れも不詳とせねばならぬ。隨つて此の段の年時も不詳となるから、かた〴〵古本に從ふがよいと思ふ。○呼び出でてを　此のヲは、歌の句間に挿む感動詞で、散文にも用ひるが、枕草子には特に多い。口語のサアに當る。○なま妬し　ナマはもと果實などの未熟なのをいふ語で、ナマナカのナマも同じ。すべて語の上につけて、よくない意をあらはす。○此の君と稱すといふ詩　散文中のものでも、朗詠にする樣な句を、すべて詩といつた。○なかなかならむ　此のナカナカは、ナマナカで、せぬ方が却つてよいだらうといふ。○左衞門の陣　建春門外に在る左衞門府の武人の詰所の事であるが、こゝは其の陣のある門の事をいつた。○少納言の命婦　主上に奉仕の女房。この女房が中宮にさし上げた文に、昨夜の淸少の一言が殿上で大評判となり、主上の御耳にも入つて、興ぜられたといふ事が書いてあつたので、中宮がはじめて御承知になつた趣である。

通釋　五月頃、月もなくて大層暗い夜、職の御曹司に人が來て、「女房はおいでゝすか」と聲々でいふから、宮樣は、「出て見なさいよ。樣子がちがつて、あゝいふのは誰だらうか」と仰せられるから、出て行つて、「是れは誰ですか。仰々しく際立つていふのは」といふと、物もいはないで、御簾を持ちあげて、ゴソリとさし入れたのは、臭竹の枝であつたのです。それで、「オヤ此の君だつたのですネ」といつたのを聞いて、「さア之を殿上にいつて話さう」といつて、式部卿の宮の君達の頼定中將や、六位の藏人なども居たのは立ち去つた。頭辨行成だけお殘りになつて、「變に、行つてしまつた人達だなア。お庭前の竹を折つて、歌を詠まうとしたのだが、『職へ行つて、同じ事には女房達を呼び出してさア、一緒に詠まう』といつて來たのに、臭竹の名を大層早くいはれて、行つてしまつたのがをかしい。誰が教へたのを聞き覺えて、一般には人が知る筈のない事をいふのか」といはれるから、「イヤ私は、竹の名とも知らないで申したものを、小面憎いとお思ひになつたでしようか」といふと、頭辨は「本當だ。よう知るまい」などゝいはれる。それから引き續き、まじめな話などをし合つてゐられると、前の人達が、「この君と稱す」といふ句を朗詠して、又集まつて來たから、頭辨は、「殿上でかうしようと約束をした、目的も果さないで、どうして歸られたか。大層變だつた」といはれると、人々は、「あゝいふ事には、何の應答が出來ましようぞ。何かいひ出しては、ひどく却つてなまなかでしよう。殿上へ歸つてからも、やかましくいひ立てゝゐたものだから、主上もお聞きになつて、面白がられました」と話した。さて頭辨も加はつて、くり返し〳〵同じ事を朗詠して、大層面白がるものだから、女房達も出て來て見た。それ〴〵話などをし合つて、歸つて行く時も、まだ同じ事を合唱して、建春門をはひられるまで、其の聲が聞えた。翌朝大層早く、少納言の命婦といふ主上附の女房が、宮樣にお文をさし上げたのに、此の事を申し上げたものだから、宮樣も御承知になり、局に下つてゐる私をお召しになつて、「そんな事があつたのか」とお尋ねになるから、「私は存じませぬ。唯何とも思はないでいひ出しましたのを、行成の朝臣がそんな風

に取りなしたのでございましようか」と申すと、宮様は「取りなすといつても」（さううまく行くものでないの意）といつて、お笑ひになりました。宮様は、奉仕の女房の誰の事でも、殿上人が譽めたとお聞きになりますと、左様に譽められた人の事をば、お悦びになるのも面白い。

九十一段

殿上より、梅の花の、皆散りたる枝を、「これはいかに」といひたるに、唯「早く落ちにけり」といらへたれば、其の詩を誦して、黒戸に殿上人、いと多く居たるを、上の御前聞かせおはしまして、「よろしき歌など詠みたらむよりも、かかる事は勝りたりかし。よういらへたり」と仰せらる。

語釋　○早く落ちにけり　和漢朗詠集、春の部にある、紀納言（長谷雄）の停二盃看一柳色一と題する、内宴詩序の中の句で、「大庾嶺之梅早落、誰問二粉粧一、匡廬山之杏未レ開、豈越二紅艶一」といふのを引用した。大庾嶺は、支那に於ける梅の名所で、天暦十年の内裏御屏風詩には、菅三品（文時）が、「五嶺蒼々雲往來、但憐大庾萬株梅」と賦して奉つてゐるが、此の類の詩題は、當時大江朝綱が、坤元錄（支那の地理書の如きものかと思はれる）中から選んで奉つたのだと云ふ。（江談抄、第四）草子の「きら〳〵しきもの」（二五四段）の中に、「坤元錄の御屏風こそ、をかしう覺ゆる名なれ」とあるのは、此の時のそれであらうか。○黒戸　清涼殿の北廊で、萩戸の北、瀧口の戸の西。女房の局があり、殿上人などが參入退出の時の口となつた。○よろしき歌　此のヨロシは、可なりとか、相當なとかの意で、非常によい事ではない。一〇二頁參照

通釋　宮様のお供をして清涼殿に上つてゐた時、殿上から梅の花の皆散つた枝を持つて來て、「これはどうか」といつたので、私は唯、「早く落ちにけり」と、朗詠の句で答へた所が、殿上人達が其の詩を朗詠して、黒戸に大層多く集まつてゐたのを、主上がお聞きになつて、「相當な歌を詠んだのよりかも、かういふ事は勝つてゐるワ。よく答へた」と仰せられた。

七十五段の一節

（一）有名な雪山の段の一節である。此の段は、十二月の初句から、（文中には「しはすの十餘日のほどに、云々」の句があるが、是れは雪の降つた日の事で、書き出しは其の前からである）翌年正月二十日までの四十日餘、雪山中心のいきさつを、日記風に書いたもので、最も長く且面白い段であるが、今は元日の日の美しい一挿話を、選釋する事にとどめた。

（二）前半が職の御曹司、後半が宮中での事になるが、こゝは前半に屬する。時は古本の傍書に據ると、長保元年の正月元日。此事については、なほ參考の條に述べる。

（三）前段と同年で、月は前になるが、行成關係の記事を續ける爲に、順序をかへた。此の段も、卷首の繪卷に出てゐるから、參照せられよ。

【参考】古本には、此の段の書き出しの傍に、長徳四年と書き、「さて雪の山はつれなくて、年も返りぬ」の條に、「長保元年正月一日、乙卯、雪降」と傍註して居り、春註本にも「勘物云」として之を引用してゐる。此の日の雪の事は、他には所見がないが、動かぬ所であらう。ところが此の日、節會が行はれ、天皇が南殿に出御された趣が、日本紀略に見えるが、それは此の時代の例として、雨には節會を停止されるが、雪には行はれる事になつてゐた爲と思ふ。尤も翌二年の元日も己卯であつたが、去年太皇太后の崩御に由つて、元日、七日とも節會を行はれなかつたから、草子いふ所と合はぬ。のみならず、中宮は前年十一月六日の御産で、まだ生昌の邸にゐられた筈である。隨つて古本の傍註は正しいものと考へる。而して古本の此の次の句は、「ついたちの日の夜」とあるので、是れに從へば、清少は其の夜宿直し、局へ下つたのは、二日朝の事になりさうであるが、實は朔日の曉更の雪をかういつたので、清少の宿直も晦日の事と見てよいと思ふ。

此の段は終始雪を中心として、筆を進めてゐる。雪は作者が初參りの頃の思出き紙に、

山とよむ斧のひびきを尋ぬればいはひの杖の音にぞありける

御返し書かせ給ふほども、いとめでたし。齋院には、これより聞えさせ給ふも、御返しも、なほ心殊に書きけがし多く、御用意見えたり。御使に、白き織物の單衣、蘇枋なるは梅なめりかし。雪の降り敷きたるに、かづきて參るもをかしう見ゆ。この度の御返事を、知らずなりにしこそくち惜しかりしか。

朔日の日、又、雪多く降りたるを、嬉しくも降り積みたるかなと思ふに、「宮これはあいなし。はじめのをば置きて、今のをば搔き棄てよ」と仰せらる。上にて、局へいと疾うおるれば、侍の長なるもの、柚の葉の如くなる宮直衣の袖のうへに、青き紙の松に付けたるを置きて、わななき出でたり。「清そはいづこのぞ」と問へば、「侍ノ長齋院より」といふに、ふとめでたく覺えて、取りて參りぬ。まだ大殿籠りたれば、身屋にあたりたる御格子を、碁盤などかき寄せて、一人念じて上ぐる、いと重し。片つ方なればひしめくに、驚かせ給ひて、「宮などさはする」と宣はすれば、「清齋院より御文のさぶらはむには、いかでか急ぎあげ侍らざらむ」と申すに、「宮げにいと疾かりけり」とて起きさせ給へり。御文あけさせ給へれば、五寸ばかりなる卯槌二つを、卯杖のさまに、頭包みなどして、山橘、日蔭、山菅などうつくしげに飾りて、御文はなし。ただなるやうあらむやはとて御覽ずれば、卯槌の頭包みたる小さ

話釋　○あいなし　九十四頁に解いた。○侍の長　齋院に奉仕してゐる侍の長。○柚の葉の如くなる　袍の衣の綠色なのを形容した。○宿直衣　冠をかぶり、袍を着、指貫を穿く。束帶を日の裝束といふに對する語。○齋院　未婚の皇女又は女王の中から出て、賀茂神社に奉仕される方。平安遷都後の事で、伊勢に於ける齋宮と同じ意義のもの。こゝのは村上天皇の皇女選子内親王で、圓融院の天延三年に卜定されてから、花山、一條、三條、後一條の五代にわたつて奉仕されたので、世に大齋院（大鏡、圓融天皇の條）と申し上げ、「宮仕所は」（二一七段）の中に、「齋院は罪深けれどをかし。まして此の頃のはめでたし」（「罪深ければ」といふのは、佛の道に遠ざるから）と

もあり、格別關心を持つた景物の一であつた。「下衆の家に、雪の降りたる」を、「月のさし入りたる」と共に、「似氣なきもの」(四二段)と惜み、其の反對に、「廣き庭に雪の降りしきたる」を、「めでたきもの」(七六段)とたゝへ、或は又「節會佛名に雪降らで、雨のかきくらし降りたる」を、「くち惜しきもの」(八五段)と稱してゐり、雪の日の事も、幾段かに書いてゐる作者である。殊には、「新しき年の初に豐の年しるすとならし雪の降れるは」(萬葉卷十七、葛井連諸會)と詠まれた歳旦の雪、あなめでたと目を見はつた書いたお方。心ばせがめでたくて、「げに賀茂の明神などのうけ奉り給へればこそは、五代まで打續き榮えさせ給ふらめな」と、大鏡の著者の評したお方。道長の方ともお親しくして、隆家からは、「追從ふかき老狐かな。あな愛敬」と罵られたお方。それも此の頃は、定子中宮と餘程お親しくされた事が、此の條でわかる。○身屋にあたりたる御格子　職の御曹司の身屋には、鬼が居るとて、隔て出してお使ひにならず、中宮は南の廂にお住ひになつた(六四段)のだから、此の時も御同樣であつたらう。隨つて身屋にあたりたるとあるけれども、身屋の前面の廂にあたつてゐた、御格子のそれであらう。格子は貞丈雜記、卷十四に、「細く木を削りて、碁盤の目の如く組みて、黑くぬるなり、御主殿の廣緣の端にあるものなり。一間毎に上に一枚、下に一枚、横にならべて入るゝなり。上の格子は、上へ開き上げて、細き金物にて、棚の如くに上へ釣り上げて置くなり。下は懸金をして、はづして取り置くやうにするなり」といひ、身屋と廂とに二重に格子ある事もあり、母屋の格子は內へ釣り(之を內格子といふ)廂の格子は外へ釣る(外格子と云ふ)由、家屋雜考に見える。是れに隨へば、こゝのは廂の間の外格子で、繪卷にも左樣に見えるが、後松日記、卷五に、「外格子は手づから上げむに便なし。されば、にや、多くは內格子を用ふ。さて內格子の寢殿は、廂の調度立つる時、障らぬ用意すべし」とあるのは、如何なものであらう。○片つ方なれば　格子を上げるには、二人で兩端を持つて、上げるのが常だから云ふ。○卯槌　漢土の剛卯から來て、魔除として正月初卯に用ひたもの。剛卯の事、漢書、王莽傳中、莽の言の中「今百姓咸言、皇天革漢而立新、廢劉而興王、夫劉爲金字、卯金刀也、正月剛卯金刀之利、皆不得行」と見え、服虔が註に、「剛卯以正月卯日作佩之、長三寸、廣一寸四方、或用玉、或用金、或用桃、著革帶佩之、今有玉石之者、銘其一面、曰正月剛卯、金刀莽所鑄之錢也」と見え、晉灼が說に、「剛卯長一寸、廣五分四方、當中央縱穿作孔、以絲系葦其底、如冠纓頭蘇、刻其上面作兩行書、文曰、正月剛卯既央、靈殳(殳は兵器なり)四方赤青白黃四色、是當(黃歟)帝令祝融以教夔龍、庶疫剛癉莫我敢當、其一銘曰、疾日嚴卯、帝令夔龍化順爾固伏化、玆靈殳既正既直既觚既方、庶疫剛癉莫我敢當」と見える。即ち王莽、漢を簒し國を立てゝ新と號するに至り、舊俗正月佩びて除災の緣とした所の剛卯と、曾て鑄た所の錢卽金刀の通行を禁じ、別に小錢を造つたもので、漢の姓の劉は、やがて卯金刀の合字だからである。此の事は、師古の註に、「莽以劉字上有卯、下有金、旁又有刀、故禁剛卯及金刀也」とあるので明瞭である。此の漢書の本文や註は、刊本江家次第にも引用してあるが、それには誤謬が多いから、煩を厭はず此に出したものである。而して此の卯槌を、五月の藥玉と同じく贈答した事は、「すさまじきもの」(二一段)の段にも見え、源氏、浮舟にも、「若君のお前にとて、卯槌參らせ給ふ」とあるので、知るべきである。○卯杖　正月上の卯日の行事で、又祝の杖とも云ひ、其の起源は卯槌と同じい。持統天皇三年正月乙卯に、大學寮が杖八十枚を獻り、日本書紀文德天皇の仁壽二年正月己卯には、諸衞府卯杖を獻じた。是れ精魅を逐ふ爲の由が見え、文德實錄前述の漢土の風俗を傳へて、其の由來する所の久しい事がわかる。かくて江家次第記する所に據れば、先づ春宮より卯杖を獻ぜられ、次に大舍人が御杖六十束を進る。曾波の木二束、比々良木、牟保許、棗、桃、梅、各六束。以上は二株を一束と爲す。燒榛十六束、皮榛四束、黑木八束。以上は四株を一束と爲す由が、延喜式大舍人寮に見え、此の中に五の大杖あり、紙を以て其の頭を包み、又半分以下、同じく紙を以て之を包む。之を內侍の女官が傳へ取つて、夜御殿の南の戶の南面、東西の壁の下に立てる。次に左右の兵衞、御には相違ないが、それよりも先づ當面の大問題たる、賭にはどうやら勝ちさうだといふので、「嬉しくも」と頭にヒントと來た所は、頗る功利的に見える。しかし是れはいけないから、取り棄てよと、中宮が意地わるく出られたのは、其の日の後刻までの事を書いてしまつたので、後の伏線になる。さて又初に返つて次の話が出て行く。卽ち作者は、雪に見入りつゝ局へ下り行く。すると、目についた侍の長、其の雪中を來る樣子に、深く鑑賞の眦を向けた。夕霧の君が元服に際して、淺黃で殿上に還るのを辛く思ひ、雲

井の雁の乳母からは「六位宿世よ」と輕蔑された(源氏、少女)其の綠袍。ましてやこゝは、たかの知れた侍の長、常ならば目につく類の者ではないが、そこはさすがに、「綠袗なりとも、雪にぬれなば、憎かるまじ」(二五二段)と書いた作者であつた。隨つて此の使者のかへる時も亦、特別に注意してゐる。さうして被物の梅襲が、雪との配合上、又前とは異なる美しさを示してゐる點に、興味を感じたのである。

杖を進る。其の儀は上と同じだが、木には少異があり、長さ各五尺三寸、とあり、(延喜式左兵衛府)補部の女官が之を取つて、晝御座の御帳の四隅に立てる。次に絲所から卯槌を進る。藏人之を取つて、絲を以て晝の御帳に結び付けて、隅の柱に懸ける。細木を副へ立てゝ柱と爲し、槌の末が出る事五寸ばかり、桃の木を用ひ、四角に削るのである。次に作物所から卯杖(是れは裝飾用の小さなもの)を進る。机二脚の上に小臺を置き、其の上に洲濱を置き其の上に奇岩、怪石、嘉樹、芳草、白砂、綠水を作り、其の中に御生氣の方(今日の所謂吉方)の獸の形を作つて、卯杖を含ましめる。若し此の日が節會に當ると、大舍人寮、兵衛等が卯杖を外辨に立て、內辨事の由を奏し、東宮の卯杖も、節會以前に進る事になつてゐた。(以上江家次第第二、卯杖事の條に據る。)○山橘　今藪柑子と云ふ。夏季香氣高き小白花を開き、紅實を結ぶ。○日蔭　日蔭のかづらの事。山地に自生する常綠草木で、莖は長く地をはひ、杉の如き細葉を密生する。○山菅　山野に自生する常綠の草。いづれも冬榮の美しい植物であるから、神事又は歲旦の裝飾に用ひた。○山とよむ云々　山が鳴りひゞく樣な、斧の響をたづねて來て見れば、それは祝の杖、即ち卯杖を伐り倒す音であつた。是れは當然仙人を想像し、仙人が力をこめて伐り出した木を、もらひ受けて作つた卯槌ですから、最もめでたい品ですといふ意が、含むものと思ふ。宇津保の俊蔭が、波斯國に漂着した時、三人の者に助けられ、琴をならつてゐると、西の方遙に木を倒す斧の音が聞える。それで三人に暇を乞ひ、聲をしるべに尋ねて或山に至ると、千丈の谷の底に根をおろし、末は空についてゐる大木を、阿修羅が伐り倒してゐる。而して此の木の上の品は大福德の木で、一寸を以て土を叩くと、一萬恒沙の寶が出る。下の品は、聲を以て長き寶となるといふのであつた。俊蔭は此の木を傳へ、琴に作つて持ちかへつたといふ話になつてゐるが、或は是等からのお思付であるかも知れぬと思ふ。○これより聞えさせ給ふも云々　こちらから御文をお上げになる時も、先方から來た御文の御返事も、格別な御心構へで、幾度も澤山書損をして、愼重な御用意の程が伺はれる。先方に對し、特に敬意をお持ちになるからである。此の「も」の一音は、春註本にはないが、古本に據つて補つた。○織物　織模樣のある絹布を云ふ。○蘇枋なるは云々　御使に賜はつた被物(かづけもの)で、蘇枋色に見えるのは、梅襲であらうと云ふ。同じ梅襲でも、男女によつて違ふので、こゝのはいふまでもなく、滿佐須計裝束抄、三、女房の裝束の色の部、五節(十一月中旬)から春まで着る類の中に、「梅重(むめがさねは、上紅梅なるも、赤色なるもあるなり)うへ白き紅梅にほひて、紅一つ、濃き紫枋、濃き單衣、青き單衣も心々なり」とあるもの。而して女房裝束を戴いた時は、左肩に懸けて、笏でかゝへて拜をし、すゝむ時には左の手を加へ、砌の外で再拜して退く由が、桃花藥葉(群書類從、雜部)に見える。○此の度の御返事を云々　いつもかういふ場合の御文は、淸少にお示しになり、其の意見を徵せられたものと見える。

通釋　元日の日、又雪が澤山降つたのを、嬉しい事にまア降り積つたなアと、思つてゐると、宮樣は「是れは宜しくない。初のは其のまゝ置いて、今積つたのをかき棄てよ」とお命じになつた。昨夜はお上のお側へ當直をしたので、今朝は局へ大層早く下つた所が、侍の長といふ者が、袖の葉の樣な綠色の宿直衣の袖の上に、靑い紙に包んだ品を、松の枝に付けたのを載せて、寒いものだから、ふるへてやつて來ました。それが目についたから、私は「それは何處からの御使ですか」と尋ねたら、「齋院からです」といふので、其の瞬間に結構なと感じて、受け取つて、又お上へ參りました。宮樣はまだおやすみになつてゐるから、身屋の前面に當つてゐる、廂の間の格子を、傍にあつ

た碁盤などをかき寄せて、足纏にして一人で我慢をして上げるのに、ひどく重い。殊に一方を持つて上げるのだから、ギチギチ音がするのに、宮様はお目覺めになつて、「どうしてそんな事をするのか」と仰せられるから、「齋院から御文があるのに、どうして急いで上げずに置けませうぞ」と申すと、宮様は、「本當に大層早かつたネ」といつて、お起きになりました。お文をお開きになつたら、五寸ほどの卯槌二つを、卯杖の樣な風に、頭を紙で包んだりして、藪柑子や、日蔭の蔓や、山菅などで、綺麗にお飾りになつて、御手紙はついて居ない。お手紙の無い筈はないと思召して、よく御覽あそばしたら、卯槌の頭を包んである小さい紙に、

山が鳴り響く樣な、斧の音をたづねて來たれば、それは祝の杖（卯杖）を伐る音であつた。

といふ意味の歌が書いてありました。

宮様が此の御返事をお書きになる時の御樣子も、ひどくお立派です。齋院樣をば尊敬していられますから、こちら樣からお上げになる御手紙にしても、御返事にしても、やはりいつも格別な御心持で、書損も澤山あそばして、御注意の程が見えます。やがて御返事も出來てお使にお渡しになり、同時に被物が出ました。白い織模樣のある單衣と、今一つ蘇枋色に見えるのは、梅裏でありましようよ。雪の降りしいてゐる處を、肩にかけて歸つて行くのも、面白く見えました。今回の御返事は、どういふのでありましたか、拜見せぬので、知らずにしまつたのは殘念でした。

二十五段

（一）長閑な春の一日、主上が笛の御稽古と云ふ、世にも美しい一段。その擧句、殿上人の事を作つた戯歌をお吹きになるといふ所に、いひ知らぬ俳味が漂ひ、平和な宮中の空氣が十分に窺はれる。

（二）所は一條大宮院、時は長保二年、主上御二十一歳、中宮御二十五歳。なほくはしくは參考の欄に書いた。

一條院をば、今内裏とぞいふ。おはします殿は清涼殿にて、その北なる殿におはします。西東は渡殿にて、渡らせ給ひ、常にまうのぼらせ給ふ。御前は壺なれば、前栽など植ゑ、ませゆひて、いとをかし。きさらぎ二十日の日のうららうらとのどかに照りたるに、渡殿の西の廂にて、上の御笛吹かせ給ふ。高遠の兵部卿、御笛の師にて物し給ふを、異笛ふたつして、高砂を折り返し吹かせ給へば、尚いみじうめでたしといふも、世のつねなり。御笛の事どもなど申し給ふ、い

【參考】禁祕御抄、諸藝能事の條に、「第二、管絃延喜天曆以後、大略不レ絶事也、必可レ通二一曲一、圓融一條吉例ニテ、今ニ笛代々御能也、和琴又延喜天曆吉例、箏同レ之、琵琶雖レ無二殊例一、可レ給事也」と仰せられ、一條院の御笛は、御父帝の御趣

味を御繼ぎになつて、後代の規模となる程、御堪能にわたらせられたのだが、その御稽古はかやうにして積まれた事を、此の段で知られるのも面白い。さて續古事談、第一に、「一條院御時、云々。さて中宮の御方に渡り給ひて、御遊ありけり。主上笛吹き給ひけり」とあるのも、此の中宮の御方であつたのだらう。

當時中宮は、御入内後十年、君寵を專らにして、最も花やかであつた前半期は、夢と過ぎ、故殿にお別れになつてからも、はや五年になる。此の間の憂き苦勞は、總說中に掲げた事項表を一瞥されとめでたし。御簾のもとに集まり出でて、見奉る折などは、わが身に芹摘みしなど覺ゆる事こそなけれ。すけただは木工允にて、藏人にはなりにたる。いみじうあらあらしうあれば、殿上人、女房は、「あらわに」とぞつけたるを、歌に作りて、「さうなしの主をはりうどの胤にぞありける」と歌ふは、尾張の兼時が女の腹なりけり。これを笛に吹かせ給ふを、添ひさぶらひて、「なほ高う吹かせおはしませ。え聞きさぶらはじ」と申せば、「いかでか。さりとも聞き知りなむ」とて、みそかにのみ吹かせ給ふを、あなたより渡らせおはしまして、「ここの者なかけり。唯今こそ吹かめ」と仰せられて、吹かせ給ふ。いみじうをかし。

語釋　○一條院　春註本には、小一條院とあるけれども、今は古本に從つた。一條院は、拾芥抄に據れば、一條南、大宮東二町とある所で、一條大宮院とも稱した。長保元年六月十四日、内裏燒亡後、主上はこゝに渡御、翌年十月十一日、新造内裏に還御になるまで、滿一ヶ年と四個月おいでになつた。十段にいふ今内裏も同所。（一五、一六頁參照）　○おはします殿は云々　一條院の寢殿を、假に清涼殿と稱し、主上の御座所となり、其の北の對に中宮がおはひりになつた。○壺　中庭、即ち殿舍と殿舍との間にはさまれてゐる庭。○前栽　和訓栞に「庭前の植木をいふ。後園にむかへたる名なり」といつてあるが、主としては花草類の植込を云ふので、（木も含まぬ事はないが）而も季節季節で移植したものが多く、此の段の例の如く、春にも無論あるが、いづれかといへば、秋が主になるので、前栽掬と蟲選とは相對したものであり、和漢朗詠に、前栽を秋の部に出したのも、是れが爲めである。○ませ　（籬）塞の義ともいふが、馬塞（馬の奔逸を防ぐ爲の垣）の略音と、見る方がよからう。（一八二頁參照）　竹又は木をあらく渡して造り、下に草花などを植ゑて、趣を添へる爲のもの。○高遠の兵部卿　小野宮關白實賴の孫、參議敦敏の男。正曆三年（月日不詳）兵部卿に任ぜられ、長德二年九月に、左兵衞督に轉じたので、此の時も其の官に在つたから、こゝは前官を以て呼んだ事になる。是れが春註本には、「高遠の大貳」とあるが、此の任官は、寛弘元年十二月二十八日で、（一代要記に據る）此の時より四年後になるから、此の段を追記の文とせねばならぬ。いづれにしても問題は殘るが、今は古本に從つた。○高砂　催馬樂、律の歌で、七段から成る。即ち（一段）高砂の、さいさごの、高砂の（二段）尾上に立てる、白玉椿、玉柳（三段）それもがと、さん、ましもがと、ましもがと（四段）ねり緒さみ緒の、御衣架にせむ、玉柳（五段）何しかも、さん、何しかも、何しかも（六段）心もまだいけむ、百合花の、さ百合花の（七段）今朝咲いたる、初花に、あはましものを、さ百合花の」。此の白玉椿、玉柳は、貴人の家に二人の娘のある比喩。練緒染緒をつけた衣は、是れも二人の姉妹の比喩。「御衣架にせん」とは、宿の妻にしようといふこと。「まだいけむ」は、心の速く意。今朝時至つて咲いた初花に、逢へばよかつたものを、あまり少年の時から早まつて、手に入れかねたのを後悔した。「さ

ても、よくわかるであらう。それに又弘徽殿、承香殿、晴部屋なども續々御入内になり、長保元年十一月には、彰子の御入内にまで進んだ。當時中宮は御產の爲に、大進生昌の邸に移御中であつた。其の翌年二月十日、彰子が立后の宣旨を受けられる爲、内裏より退出され、同十二日に中宮が宮中におはひりになつた。此の段はそれから八日後の事である。此の文を讀んでは、唯如何にも長閑な美しい情景のみが目にうつるけれども、中宮主從の御心中は果してどんなであつたらうか。それは十分想像する事が出來る。尤

も主上の御情愛は、前後少しもおかはりにならなかつたやうで、中宮には是れ一つが、お命の綱であつた。「心ばへのおとなゝ〳〵しう哀なる方は誰かまさらむ。又人をあまた見ぬにやあらむなど、いみじう御心ざしあるさまに仰せらるゝ」（榮花、浦々のわかれ）と書いたのは、長徳二年、中宮が尼になられた時の事であるが、其の後、中宮が職の御曹司に參られた時も、「なほいと程遠しとて、近き殿に渡し奉りて、上らせ給ふ事はなくて、われおはしまして、夜なかばかりまでおはしまして、後夜にぞ歸らせ給ひける。御心ざし、昔よりもこよなげなり。云々。其の程、弘徽殿、承香殿など參りこみ給ふ。されど御心ざしの有様、こよなげなり」（同上）といふ如き御寵遇であり、かくて御懐姙の結果、大進生昌の邸に御退出になる。六段が即ちそれである。其の時御生誕になつたのが、第一皇子敦康親王。今回の御參内には、女一の宮脩子内親王と、此の皇子をもお連れになつた。主上は「よろづ心のどかに、宮に泣きみ笑ひみ、唯御命を知らせ給はぬ由を、夜晝語らひ聞えさせ」られたけれども、宮は物心細げに、哀な事のみを申し上げら

枕草子

ん」は一種のはやし詞。（主として橘守部の入綾の說に據る）○わが身に芹摘みし　不足不滿に感ずる意をあらはす故事。更級日記に、「いとよしなかりけるすずろ心にても、殊の外にたがひぬる有様なりかし。（歌）いく千度水の田芹を摘みしかば思ひし事のつゆもたがはぬ」讚岐典侍日記に、「道理に脱ぐ（喪服）べき折も待たず、脱ぎてむ事の心憂きに、芹摘みしといひし古事を、身に思ひよそへらるゝ」など見え、又「芹摘みし昔の人もわが如や心に物のかなはざりけむ」といふ古歌もあり、此の故事に就いては、清輔奥儀抄、下之下、仲實綺語抄、中、範兼童蒙抄、第七、顯昭袖中抄、第六、私聚百因緣集、第七等に見え、文選獻芹の故事に引きつけた說もあるが、やはりわが國の古い說話から出た趣に解するのがよい。尤もそれにも多少の異同はあるけれども、今は綺語抄のを引いて置く。即ち「芹摘みし云々」の歌の條に云ふ、「此の歌は、昔あさましかりし山の男の、殿ばらの南面にて掃除などせしに、思ひかけず御簾を風の吹きあげたりけるに、内にいつくしき娘の、芹を食ひてありけるを見て、理なく心ざしありけり。人知れずめしし芹を摘み歩きけれど、此の生さし心に叶はで止みにけり。それをかく詠めり」。○すけだた　不詳。○木工允　木工寮は宮内省の被管で、工匠の事を掌る。允は其の判官。六位の藏人を兼ねて、常に禁中に伺候したのである。○あらわに　古本「あらはこそ」諸本「あらはに」とあり、春註には、顯はな事で、擧動の露骨無遠慮なのを云ふとなし、盤齋抄には、單に荒々しき意と說くけれども、濱臣が引いた或人の說に、「あらわに」の假名ちがひで、荒鰐だらうといつたのが、宜しいと思はれ、黑川博士も早く此の說に據られた。○さうなし　左右なしで、無二無三などいふと同じく、無類の意。○尾張の兼時　紫式部日記の、賀茂臨時祭に道長の息教通の勅使に立つ條に、「丑の時にぞかへり參れば、御神樂なども様ばかりなり。兼時が去年まではいとつき〴〵しげなりしを、こよなく変へたるふるまひぞ、見知るまじき人の上なれど、哀と思ひよそへらるゝ事多く侍る」とある人で、其の神樂に長けた事は、續古事談、第五にも見え、同書、又「一條院御時、清涼殿にて臨時樂きこしめしけるに、舞人身高、兼時、好茂とりどりにいみじかりければ、おの〳〵賞かうぶりけり。一度に三人まで勸賞あまりなりと、人思へりけれども、いづれも劣らざりけるなるべし」といふ一話を傳へる。○聞き知りなむ　自分の事と、悟るだらうの意。○あなたより云々　一度清涼殿の殿上の邊まで見においでになつて、すけただの居らぬ事を見きはめて、あちらから戻つて來られた。ひどく文章を略して書いたのである。

通釋　一條院をば今内裏と申した。主上のいらせられるのは清涼殿で、其の北の對に宮様はいらせられた。西と東とに此の御殿をつなぐ二筋の渡り廊下があつて、主上がしよつちゆう宮様御殿の方においでになり、宮様も亦清涼殿へお上りになる。此の宮様の御殿の御前（南側）は中庭であるから、草花などを植ゑ、笆を結つて大層おもしろい、二月二十日の日ののんびりゆつたりと照つてゐるのに、渡殿の西の廂で、主上が笛をお吹きになる。高遠の兵部卿が御笛の師匠であつたのですが、別々の笛二本で、（主上と高遠と）催馬樂の高砂をくり返しお吹きになるから、やはりひどく結構だといふのも尋常ないひ方で、實は結構とも何とも申し上げ様がない。高遠は御笛の事に關し、いろ〳〵御注意を申し上げてゐられる。それが亦大層結構である。私も多くの女房達と共に御簾の側まで出て行つて、此の有様をお見上げする時などは、わが身に何の不足など感ずる事はない。すけたゞは木工寮の判官で、藏人になつてゐるのです。ひどく荒々しい男だから、殿上人や女房は、「荒鰐」といふ渾名を付けたのを、歌に作つて、「さうなしの主、をはりうどの胤にぞありける」と

れた。（桑花、かがやく藤壺）此の時は、三月二十七日までおいでになり、三度目の御懐姙をもあそばした。

【参考】三月二十七日に、主上とお別れになつて、此の三條の宮に御退出になつてから、一個月あまり、いよ〳〵御懐姙と確定しては一層御物思がまさる。一向物も召し上らず、夜晝泣いてばかりいらせられる。御兄の伊周、御弟の隆家等は、いみじき大事として、祈の事をと思ふけれども、世の中で少し人に知られ、人がましい名僧などは、道長方に憚り、いづれも故障を申し立てて参らぬ。四月つごもりには、新に中宮に立たれた彰子が、宮中におはひりになる。（桑花、かゞやく藤壺）桑枯盛衰全く所を異にした。其の五月五日の記事が是れである。節は五月にしくはなし」（三六段）と書き、様々其の理由を説明した作者、其の一代の中に、こんな悲しい端午にあはうとは、恐らく夢の又夢であらう。隨つて其の感想は無限であつたに違ひない。それにしては、此の段は又、何たる短篇であらう。けれども、愚痴と泣言とは死んでもいひたくない作者である。中宮の此の御一首を傳へるだけで、それでもう十分

百九十五段

（一）前段に續けて見るべきで、長保二年五月五日の事に屬する。是れが恐らく草子中で、年時の分明なもの〻最終記事であらう。かうして作者は、御懐姙中の中宮のお側に侍して、何くれといたはりかしづき申し上げて居たのである。

（二）姫君倫子内親王は御五歳で、いたいけ盛り、若宮敦康親王は、昨年十一月の御生誕で、まる六個月、人の顔見覚えて、お笑ひにもなり、お話もなさる。どんなにお可愛い事であつたらう。此の御二方に對し奉つては、御母宮はいふまでもなく、女房達までも、總べて忘れる事が出來たらう。しかし何といつても、中宮の御心は淋しい。例によつて作者の警句、「わが心をば」と感謝していらせられる。此の一首には、綿々として盡きぬ哀愁が籠つてゐる。

歌ふのは、尾張の鄙時の女の子だからなのです。此の歌を主上が笛でお吹きになるのを、高遠がお側にお付き申してゐて、「も少し高くお吹き遊ばせ。すけただはよう聞いて居りますまい」（聞いても わかる樣な男ではありませぬの意を含む）と申すと、主上は、「どうして吹かれようぞ。だつても聞いて悟るだらう」と仰せられて、ソツとばかりお吹きになつたのに、やがてあちらに見に行つて戻つておいでになり、「此の者は居らぬワイ。唯今こそ吹かう」と仰せられて、安心して高くお吹きになりました。それは實に面白い事でした。

三條の宮におはします頃、五日の菖蒲の輿などもて參り、藥玉參らせなどす。若き人人、御匣殿など藥玉して、姫宮、若宮につけ奉らせ給ふ。いとをかしき藥玉外よりも參らせたるに、青ざしといふ物を、人のもてきたるを、青き薄樣を、艶なる硯の蓋に敷きて、「これませごしにさぶらふ」とて參らせければ、

みな人は花や蝶やといそぐ日もわが心をば君ぞ知りける

と、紙の端を引きやりて書かせ給へるも、いとめでたし。

語釋　○三條の宮　古本の傍註に、生昌三條宅とある所。之を宮といつたのは、中宮の御在所となつた爲で、日本紀略、長保二年八月八日の條に、「皇后宮自生昌朝臣宅入御内裏」とあるのを、同月二十七日條には、皇后宮還御本宮と書いて、生昌宅とも本宮ともいつてある。○菖蒲の輿　延喜式、左近衛府の中に「凡五月五日、藥玉料、菖蒲、艾（蓬に同じ）總盛雜花十棒盛覆居蓋三日平旦申内侍司列設南殿前（諸府准之）」とあり、之を内藏寮の官人、行事の藏人等が絲所の女官に給し、藥玉に作らせる。而して四日夜に、主殿寮の官人が殿舍に葺くのも、此の菖蒲を用ひたのであらう。讃岐典侍日記に、「五月四日夕方になりぬれば、云々。菖蒲の輿、朝餉の壺にかき立て〳〵、殿毎に人々上りて、ひまなく葺きしこそ、みづ野の菖蒲も、今は盡きぬらむかしと見えしか」とあるの

と思つたのであらう。

かくて主上の御志は、どこまでもかはらぬ。内には、いとど皇后宮の御有樣をゆかしく思ひ聞えさせ給ひつゝ、おぼつかなからぬ御消息、つねにあり」（同上）とあり、宮樣達の御うつくしさは、限りない。けれども、月日の過ぎゆくまゝには、皇后宮の御嘆のみがまさる。「八月になりぬれば、皇后宮には、いと物心細くおぼされて、あけくれは御涙にひぢて過させ給ふ。萩の上風、萩の下露も、いとど御耳にとまりて、過させ給ふにも、いとど昔のみ戀しくおぼされて、ながめさせ給ふ」

（榮花、鳥邊野）は其の眞を傳へたものと思ふ。ついで八月八日には、内裏に入御になり同二十七日までおいでになつた。是れが主上との最後のお別れである。それからも、皇后宮の御惱みの日は續く、肉體的にも御衰弱になるばかりであつた。さうして十二月十五日、第二皇女媞子内親王の御生誕があり、其の翌日、朝霜の消える如く崩御になつた。是れに反して、中宮彰子は、榮花の篇名のそれの如く、かゞやく藤壺として、其の光が增すのみであつた。道長の爲には思ひのまゝの世界が開けた。「この

は卽ち是れである。而して五日には、早旦書司が菖蒲の瓶を供し、絲所から藥玉二琉を獻じ、藏人が之を取つて、晝御座の母屋の南北の柱に結び付ける。當日又、節會が行はれ、參朝の王卿以下に、各藥玉一琉を賜はり、之を右肩にかけて左腋に垂れる。（以上、西宮記、卷六に據る）是れは宮中の公儀であるが、榮花物語、かゞやく藤壺に、「五月五日になりぬれば、云々。御藥玉、菖蒲の御輿などもて參りたるも珍らしうて、若き人々見興ず」（長保二年の條）とあるのは、彰子の御方の事であり、此の段と同日の事に屬するが、是れは後宮の御内々の事であり、いはば御祝儀として、輿の形なども小さく作り、半はお慰みの料に、藥玉と共に持つて出たものであらう。○藥玉　麝香、沈香などの香藥を、練り固めて小丸とし、之を十二、（閏月ある年は十三）錦の袋に入れ、鄰蹋其の他の造花や、菖蒲、蓬などを結び、蟲などを造り付け、五色の絲を長く垂れ下げたもの。禁中同樣、后の宮などへも之を奉つた事は、「節は」の段（三十六段）に見える。但し同段に、縫殿寮から獻ずる由に見えるのは、絲所が同寮の別所だからであらう。さて此の物は、漢土で長命縷、辟兵繒、續命縷、綵絲などと稱し、風俗通に、「五月五日綵絲を以て臂に懸くれば、鬼及び兵を避け、人をして瘟を病まざらしむ」とあるに據り、我が國でも用ひ始めたもの。私にも作つて之を帶び、又互に贈答をした事は源氏、螢の卷なる玉葛の姫君の許に、「藥玉などえならぬ樣にて、所々より多かり」と書き、「すさまじきもの」の段（三段）にも、「藥玉卯槌などもて歩く者」といつてあるのをも、參照すべきである。而して是れは簾に懸け、少女の袖に着けたりなどしたので、貞丈雜記、卷一に、其の圖を出し、且袖につけるものは、卽ちかけ香だといつてゐる。○御匣殿　中宮の御妹。（一二五頁參照）○靑ざし　春註に、靑麥で製した菓子と云ひ、和訓栞には、大和故事といふ書を引いて、「靑麥を煎りて、臼にて碾れば、よりたる

絲の如し。よつて靑ざしといふ」といひ、淸水濱臣も、麥の未熟なのを煎つて後、皮を去つて其のまゝ臼で靜にひき、それを固めてつくるので、形は

の如きだといつて、略同說であるが、岩崎美隆の私記には、なほ豐後の國人の話に、同國では、麥の穗のまだ若いのを手で細長くもんで、砂糖などをふりかけ、それをばサシといつて食ふのは、是れと緣があるなほし戀しくしぬびかねつも」同、十四に、「うませごし麥はむ駒のはつ〳〵ににひはだふれしこどなほし戀しくしぬびかねつも」と見え、古今六帖、第二には、後の歌を、「ませごしに麥はむ駒のはつ〳〵に及ばぬろしかなしも」と見え、古今六帖、第二には、後の歌を、「ませごしに麥はむ駒のはつ〳〵に及ばぬ戀も我はするかな」と、詞をかへて出してゐる。こゝは恐らく、當時流行の六帖の歌に據つたもので、靑麥の菓子だからの思ひ付であらう。○皆人は云々　此の御歌の初句につき、美隆は、彰子の御方ざまの世にきらめき給ふ事を、ほのめかして仰せられたのだといつてゐる。それも尤もだが、今少し廣く一般におしわたして、見る方がよいかと思ふ。卽ち今日は端午だからとて、菖蒲の輿だ、藥玉だといつて人が大さわぎをして浮かれてゐる日も、自分の慰まぬ心は、お前だけが知つてゐると、仰せられたのであらう。「花や蝶や」は、春の季節でもないのにと、怪む人もあらうか知らぬが、是れは藥玉に飾りつけてあるものに就いて、仰せられたのである。なほ又、「君ぞ」の「ぞ」は、大層重いので、外の人はどんな心でゐるかわからぬがの御心持がある。

通釋　宮樣が三條の宮にいらせられる頃、五月五日の御節供に當り、菖蒲の輿などを持つて參り、藥玉を獻上したりしました。それで、若い女房達や、宮樣の御妹の御匣殿などは、藥玉をこしらへて、姫宮や若宮につけてお上げ申した。大層面白い藥玉を、外からも獻上しましたが、或人が

後の御有樣、見奉らせ給はましかば」と書いた作者は、今更皇后宮の御苦惱を、長からしめようといふ考ではない。是れ程の道長も、曾ては其の前に蹲踞せしめた、故殿道隆の威勢の赫々たりし過去を追想して、せめても の腹いせにしたものと思ふ。(一一〇段、參照)

【參考】一條院の石清水行幸は、永延元年十一月八日、長德元年十月、(以上、日本紀略)長保五年三月四日(本朝世紀)の三回である。初度のは、榮花物語、さまざまの悅びの卷に「ことしは年號かはりて、永延元年といふ。(中略)三月は石石水の行幸あるべければ、いみじう急がせ給ふ。行事此の權中納言殿(道兼)せさせ給ふ。御位まさらせ給ふべきにやと見えたり。宮(東三條院)例の一つ御輿にておはしませば、いとおほん有樣、ところせきまでよそほし」とも見え、天皇はまだ八歲の御幼齡であるから、御母后が一つ御輿に添ひ乘らせられたのである。二度目のは日本紀略、十月十九日條に「大祓、依二石清水行幸一也、今日試樂、云々」同、二十一日條に、「石清水行幸、今日淀河無二泛橋一、以二數百艘船一所レ渡也」と見えて、其の盛儀の程が忍び申し上げられる。草子云ふ所

青ざしといふ菓子を持つて來たのを、しやれた硯の蓋に、青い薄樣を敷いて、「これはませごしでございます」といつて、宮樣にさし上げたら、宮樣は、

人は皆、今日はお節供で、やれ藥玉だの、やれ何だのといつて、面白さうに騷ぎまはつてゐる日も、自分の慰まぬ心は、お前だけが知つてゐてくれるワイ。

とお詠みになつて、紙のはしを引きさいて、お書きあそばしたのも、大層結構でした。

百九段

(一) ものはづくしの一を選んだ。初に「はしたなきもの」三條を擧げ、中程から轉じて、一の例話を語つた。

(二) 此の例話なる一條院の石清水行幸は、長德元年十月二十一日のであらう。齊信の官については、少しく疑問があるから、參考の欄に書いて置いた。

(三) 八幡行幸の御鹵簿の樣は、卷首の繪卷に見える。なほ又「八幡の行幸の」から「いふもおろかなりや」までの所は、昭和八年度の口述試驗の問題にも出た。

はしたなきもの　異人を呼ぶに、我かとてさし出でたるもの。まして物取らする折はいとど。おのづから人のうへなどうちいひ謗りなどもしたるを、をさなき人の聞き取りて、其の人のある前にいひ出でたる。哀なる事など、人のいひてうち泣くに、げにいと哀とは聞きながら、涙のふと出で來ぬ、いとはしたなし。泣顏つくり、氣色殊になせど、いとかひなし。めでたき事を見聞くには、又すずろに、唯出で來にこそ出で來れ。

八幡の行幸の還らせ給ふに、女院の御棧敷のあなたに、御輿をとどめて、御消息申させ給ひしなど、いみじくめでたく、さばかりの御有樣にて、畏まり申させ給ふが、世に知らずいみじきに、まことにこぼるれば、化粧じたる顏も皆洗はれて、いかに見苦しかるらむ。宣旨の御使にて、齊信の宰相中將の御棧敷に參り給ひしこそ、いとをかしう見えしか。ただ隨身四人いみじうさうぞきたる、馬副の細う仕立てたるばかりして、二條の大路廣う淸らにめでたきに、馬をうちはやして急ぎ參りて、少し遠くより下りて、そばの御簾の前にさぶらひ給ひし。院の別當ぞ申し給ひし。御返し承りて、又走らせ

は、此の時の事で、東三條院は二條の大路の棧敷屋に於て、還御の御輿をお迎へになつたのであるが、天皇は既に十六歳、かやうにお一人で行幸になる、立派な鹵簿を御覽遊ばすにつけ、そゞろに永延の昔をも思し召しいでゝ、どんなにお嬉しかつた事であらう。

齊信は長徳二年四月二十四日に參議に任ぜられ、左中將元の如し（公卿補任）とあるのだから、其の前年十月頃は、まだ頭中將であつた。然るを此の段に宰相中將と書いたのは、一の疑問であるが、それは此の段は、もといろ〳〵物はづくしを書く中に得た題の一で、「はしたなきもの」を二三書く中に、氣がそれて思ひ出した例話であるので、其の頃齊信は參議であつたから、かう書いたのであらう。隨つて此の段を書いたのは、長徳二年以後といふ事になる。

【參考】作者の子供好は有名なものであり、草子中に書いた乳兒、童の沙汰は、少くとも二十數段に

歸り參り給ひて、御輿のもとにて奏し給ひしほど、いふもおろかなりや。さて打渡らせ給ふを、見奉らせ給ふらむ女院の御心、思ひやり參らするは、飛び立ちぬべくこそ覺えしか。それには長泣をして、笑はるるぞかし。よろしき際の人だに、なほ子のよきはめでたきものを、かうだに思ひ參らするも畏しや。

語釋　○はしたなきもの　ハシタは端または半を訓み、ナキは助語。不都合なもの、具合のわるいものなどの意。○八幡の行幸の云々　一條院が石清水八幡宮へ行幸あそばして、還御あらせられる時の意。略して妙にいつた文。○棧敷　古事記に佐受岐、日本紀に假庇をサヅキと訓ずる。サジキは其の轉で、棧敷は借字。行幸又は祭等の場合、其の鹵簿や使舞人等の御通行を、路頭で拜觀する爲に、假に設けるもの。○隨身、儀衛の爲に召し具する近衛の武人で、弓箭を帶する。其の人數は、弘安禮節（群書類從、雜部）に、太上天皇十四人。即ち將曹二人、府生二人、番長二人、以上騎馬　近衛八人、歩。攝政關白十人。即ち府生二人、番長二人、以上騎馬　近衛六人。大將大臣八人。納言參議六人。中將四人。少將二人。諸衛督四人。佐二人と見え、本文に四人とあるのは、當時齊信が中將であつた事を裏書する事にもなる。○馬副　貴人の乘馬に附き副うて、用を便ずる者。物具裝束抄（群書類從、裝束部）馬副事の條に、「行幸行啓、並一員御幸之時、公卿召二具之一、祭使召二具之一」と見え、同人數事の條に、「大臣十人、大納言八人、中納言六人、參議四人、祭使八人常事也」と見えるが、齊信はまだ、殿上人だから、二人であつたらうと思ふ。○うちはやして　ハヤスは、ハエある樣にすること、にぎやかにすることなどをいふので、馬を躍らせたこと。古本には「うちはやめて」とある。○院の別當　院司といつて、太上天皇又は女院に關する事務を管する、役所の長官。この下に年預、判官代、主典代等があつた。

通釋　具合のわるいもの　別人を呼ぶのに、私かといつてさし出たもの。物をやる時は、一層具合がわるい。自然人の事などを話して、惡口などもしたのを、子供が側で聞いて覺えてゐて、後日に其の人の居る前で、それをいひ出したのは、具合がわるい。哀な事などをいつて、人が泣くので、なるほど大層哀だとは聞きながらも、涙がちよいとは出て來ないのは、大層具合がわるい。是れに反して、結構な事を見たり聞いたりする時には、又出ないでもよい感涙が、むやみにどん〳〵出て來る。（それに就いて、一つの例話を附加する）

主上が石清水八幡宮に行幸あそばして、還御になります際に、御舟東三條の女院（詮子）が、鹵簿を御覽になる爲に、路傍にかけられた御棧敷の向うに、御輿をおとめになつて、御挨拶を申し上げられました事などは、非常に結構で、主上といふ樣な、あれ程尊貴な御身分で、敬意を御表しになるのが、無類に結構なので、本當に感涙がこぼれますから、お化粧をした顏も皆はげて、どんなにか見苦しかつたでしよう。主上の仰言をお傳へになるお使者として、齊信の宰相中將が御棧敷に來られたのは、大層結構に見えました。唯四人の隨身の立派に裝束してゐるのと、馬副のスラリと仕立てたのだけを連れて、二條の大路の廣くてきれいで立派な所を、勢よく馬を躍らせて、急いでおいでになつて、少し遠くから下りて、棧敷の側の御簾の前においでになりました。すると、女院のお

上つてゐる。其の中の二三は語釋の中にも引いて置いたが、此の段の如きは、殆ど大部分を其の關係のもので埋めてゐる。しかのみならず、「尼にそぎたる乳兒の、云々」、「あからさまに抱きて、うつくしむ程に、云々」の如き、いづれも作者が子供を愛するあまり、微細に觀察し、又は自ら經驗した事に屬するものと思はれ、我を忘れて熱ずりをしたであらう、作者のにこやかな顏をも想起する事が出來る。なほいへば子供を遊ばせてゐる前を通るにもひや〳〵し、「物いはぬ乳兒のそりくつがへりて、人にも抱かれず泣きたるもの」を、「おぼつかなきもの」（五八段）の中に數へ、又物いはぬ乳兒の、泣き入りて乳も飲まず、いみじく乳母の抱くにもやまで、久しう泣きたる」を、「胸つぶるるもの」（一三一段）の中に書いた如きも、經驗といふよりも、寧ろ母たる經驗のない人の口からは、ちよつと出にくい事柄ではあるまいかとさへ思はれる。

だから、「人の子うみたる、男女とく聞かまほし」（一四〇段）、「とくゆかしきもの」といひ、產前產後の事から、產兒の前途の不安までを、「心もとなきもの」（一四一段）の中に役所の長官が出迎へて、宣旨を承つて女院へ申し上げました。女院から御返事がある、それを又別當がお取り次をして、齊信に傳へる、齊信はそれを承つて、又馬を走らせて歸つておいでになつて、御輿のそばで主上に申し上げられた。其の時の有樣は、結構とも何とも申し上げ樣がありませぬワ。それから主上の御輿が御通過になるのを、御覽あそばした女院の御心中をお察し申すと、私も嬉しさに、飛び立ちさうな感じがしました。それには長泣をして、朋輩から笑はれましたワ。一通りよい身分の人でさへも、やはり其の子がよいといふ事は、結構なものですのに、まして尊い女院の御身として、主上を御子にお持ちになつたといふ事は、何たるお結構な事だらうかと、かうだけでも御推量申し上げるのも、下々の私などの分際としては、恐多い事ですワ。

百三十二段

（一）純然たるものはづくしの一段を取つた。此の中には、動植物、器具の類も交つてゐるが、大部分が乳兒に關するもので、是れで見ても、作者が如何に子供好であつたかがわかる。

（二）此の段と對照して見るべきは、「きたなげなるもの」（一二九段）、「むつかしげなるもの」（一三六段）で、殊に「ぬひ物のうち。猫の耳のうち。鼠のいまだ毛も生ひぬを、巢の中よりあまたまろばし出でたる」は、後段中のもの、作者の觀察が、如何に精緻にして、而も奇警なるかの例證として、擧げるべきものである。

うつくしきもの　ふりに描きたる乳兒の顏。雀の子のねぞなきするに躍り來る。又へになどつけて居ゑたれば、親雀の蟲などもて來て哺むる、いとらうたし。三つばかりなる乳兒の、急ぎて這ひくる道に、いと小さき塵などのありけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなるおよびに捉へて、大人などに見せたる、いとうつくし。尼にそぎたる乳兒の、目に髮のおほひたるを搔きは遣らで、うちかたぶきて物など見る、いとうつくし。襷がけに結ひたる腰のかみの、しろうをかしげなるも、見るにうつくし。大きにはあらぬ殿上童の、さうぞき立てられて、歩くもうつくし。をかしげなる乳兒の、あからさまに抱きてうつくしむ程に、かいつきて寢入りたるもらうたし。雛の調度。蓮の浮葉のいと小さきを、池より取りあげて見る。葵の小さきも、いとうつくし。いみじう肥えたる乳兒の二つばかりなるが、白ううつくしきが、二藍の羅など、衣長くて襷あげたるが、這ひ出でくるも、いと

は書き並べてゐる。隨つて「男も女も法師も、よき子持ちたる人うらやまし」（一三九段、「うらやましきもの」）と云ひ、前に釋した一八七頁にも同じ意見の事を云つてゐり、「めでたきもの」、（七六段）の中に、「今上一の宮まだ童にておはしますが、御をぢに、上達部などの若やかに清げなるに、抱かれさせ給ひて、殿上人など召し使ひ、御馬引かせて御覽じ遊ばせ給へる、思ふ事おはせじと覺ゆる」と書いた敦康親王や、積善寺供養の段（九〇段）に「大納言、三位中將、松君もゐて參り給へり。殿いつしかと抱き取り給ひて、膝にすゑ給へる、いとうつくし。云々。松君のをかしう物のたまふを、誰も誰もうつくしがり聞え給ふ」と書いた松君（伊周の子道雅）などは、眞にめでたくうつくしい乳兒の標本として、作者は目にお入れ申しても、痛くはなかつたものであらう。

乳兒の觀察に徹底した作者は、決して其の迷惑する場合をも書く事を忘れなかつた。「鳥は」（三八段）の中に、「夜鳴くもの、すべていづれもいづれもめでたし。乳兒どものみぞさしもなき」と書いた作者は、「夜泣といふものする乳兒の乳母」を、「苦しげなるうつくし。八つ九つ十ばかりなるをのこの、聲をさなげにて文讀みたる、いとうつくし。鷄の雛の足高に、白うをかしげに、衣短なるさまして、ひよひよとかしがましく鳴きて、人のしりに立ちてありくも、また親のもとに連れ立ちあるく、見るもうつくし。かりの子。舍利の壺。瞿麥の花。

話釋　○うつくしきもの　ウツクシは、美なもの、即ち綺麗な物もいふが、こゝはかはゆらしい（愛すべき意）のをいふので、イツクシは其の音通、ウツクシム、イツクシムは、これが動詞となつたもの。○ふり　ウリ（瓜）。大鏡、道長傳に、「ふりをこはば、うつは物を設けよ」と見え、ウリを又フリともいつたものと思はれるが、古本にはウリとあつて、是れに從へば問題がのこらぬ。而して赤染衞門集に、「久しう音せぬ人に、うりに書きて」とあるのは、之を歌書く料にしたもの。兎に角瓜が當時こよなき食料の一として、宮中でももてはやされた事は、大槐祕抄には、「村上の御日記に蜜瓜のたねを、鴻臚館のあづかりに給ひて、鴻臚にうゑさせられたりとこそ候ふめれ。おほやけは、よき瓜うゑさせて、きこしめしけるにこそ候ふめれ。今は人の領となりて候ふめり」とあるのを參考すべきであり、隨つて女房の局などにも持ち込む機會が多く、こんないたづらもして遊んだものと思ふ。○ねずなき　鼠の鳴く樣に、チユウチユウといふこと。それが畢竟雀の鳴聲にも似てゐるから。○へになど云々　春註には、愛して紅などつけたのであらうかと云ひ、抄には、エ（柄）即ちとまり木にすゑたのだと解き、通釋には、伊呂波字類抄に「繖を。にあて、「繖所以加飛鳥也、今案俗以長絲結肩、小應也」とあるのを引いて、子雀の足に絲をつないで、そこに居ゑたのだと解かれたが、是れに隨ふべきである。ところで、「雀の子飼」は、「心ときめきするもの」（二六段）の中にも見え、紫上の幼時、伏籠の中に飼つておかれた事もあり、（源氏、若紫）當時子を捕へて飼養する事の、流行した樣が知られる。○および　指の事で、當時專ら用ひた語だが、和名抄、形體部、手足類に據れば、「指、普旨、由比、俗云、於與比」、とあつて、ユビをオヨビといふ事は、俗言であつた事がわかる。○尼にそぎたる　尼の頭髮を、項程の長さに切り揃へて垂れてゐるのを、垂尼といふが、恰もそれの如く、幼兒の髮を切りそろへて置くこと。前の額にかゝる所は、眉の上あたりで切り揃へる。源氏、薄雲に、「この春よりおふす御髮あまそぎの程にて、ゆら〳〵とめでたく、面つきまみのかをれる程など、いへば更なり」とあるのは、明石の姫君の幼時の事で、女子の袴着（三四歳）以前は、此の姿にして置き、袴着がすむと、髮をのばすのである。○擧がけ　源氏、薄雲の「唯姫君の御たすき引きゆひ給へる胸つきぞ、うつくしさ添ひて見え給へる」の條の契沖の註（源註拾遺）に、萬葉、十六の竹取翁の歌、「みどり子の、わく子の身には、たらちしの、母にいだかえ、たすきかく、はふ子が身には、ゆふかたぎぬ、ひつりにぬひき」とあるのを引きあて、略解には、「ひつりに云々」を、「千鳥がけ」といふものかと云ひ、岩崎美隆は、宇津保、國讓下に、「二の宮あからかなる綾、かいねりの一重ね、織物の直衣、たすきがけの御袴、今宮こもんの白き綾の御衣、一重ね奉りて、たすきかけて、いとをかしく見えて、はひ歩き給ふ」など見えるタスキは、袴についたもので、それを背から胸へかけて結んだものと思はれ、是れで袴を落ちぬやうにし、かねて衣の袖を約して、邪魔

ものゝ」の中に數へてゐるのは、卽ちそれでさことなる事なき人の、小さき子どもなどあまた持ちて、あつかひたる」を、「むつかしげなるもの」、（一三六段）と書いたのは、所謂貧乏人の子澤山で、今も昔も困りもの、同情すべきものだからなのである。

作者は鳥の中では、鶯よりも時鳥を愛し、夜鳴くもの、すべていづれもいづれもめでたし。云々」、色彩では最も紫をよいとして、「すべて紫なるは、何も何もめでたくこそあれ。花も絲も紙も。紫の花のなかには、杜若ぞ少しにくき。色はめでたし」（七六段、「めでたきもの」）といつてゐる。こゝには同じ調子で、「何も何も小さき物は、いとうつくし」と云つてゐる。卽ち作者の態度は頗る鮮明なので、是れには作者の趣味や性格が窺はれると共に、其の文章に特有な一つの型をも見る事が出來る。

而して此の小さい物を愛すると云ふ事は、子供を愛すると云ふ事と、思想に於て共通である。何はともあれ、單に乳兒の觀察に於て徹底したのみでなく、是れ程までに母性愛の滿ち溢れてゐたかの如く見える作者、唯一の淸少納言女の材料は別としても、

にならぬやうにしたものでゐらうといつてゐる。（春曙抄の書入本にあつて、武藤氏も引いて居られる。）是れで幼兒の着衣には、便宜上古くから斯樣なしぐさのあつたものと解してよいと思ふ。世俗淺深祕抄、下の、東宮着袴裝束の中に、「有稱袴、是讃樣、人々不分明、但或說曰タスキ、祕事歟」とあり、東宮の御着袴には、特に上代の風俗の殘り傳つてゐたものと見え、玉の小櫛に、たすきかけを、單に袴着の時にある事かといつてあるのも、此の事實に合つてゐる。○殿上童　攝家の子息などの、元服以前に昇殿して、（童殿上といふ）お側の御用を勤める者。上童ともいふ。御形の宣旨が、殿上童のいとをかしげな人形を作り、みづらゆひ、裝束などうるはしうして、ともあきらのおほきみといふ名を書いて奉つた事が、一五九段に見え、その俤がしのばれる。○乳兒　語原はいふまでもなく、乳のみ兒で、當歳からはじまつて、廣義には十歳前後までのものをいふ。「ちごのなくなりたる產屋」（二二段）は、最も此の語原に卽した用例であり、「乳兒遊ばする所の前わたりたる」（二六段）、「いみじううつくしき乳兒のいちごくひたる」（三九段）は、三四歳と見てよからうし、特に「三つばかりなる乳兒」（一〇三段、並に本段）と、年を冠した所もあるが、是等は「あなたこなたに住む人の兒どもの、四つ五つなるが」（一三三段）や「あからさまに來たる兒ども、わらはべをらうたがりて、をかしき物など取らするにならひて」（二四段）と書いた、兒ども、童などゝあまりちがはぬので、源氏、若紫には、當時十歳ばかりの紫上を、「さてもいとうつくしきちごかな、何人ならむ」とも書いてあるが、コドモとかワラハベとかいふよりも、チゴといつた方が、かはゆらしく聞えるからの用法と思はれる。○雛の調度「過ぎにし方、戀しきもの」（二七段）の中に、「雛遊の調度」を擧げたのは、幼時の回想さもあるべきであるし、紫上が「雛遊にも繪書い給ふにも、源氏の君とつくり出でゝ、淸ら

なる衣着せかしづき給ふ」（源氏、若紫）といつた其の衣や、「雛やらふとて、いぬきがこれをこぼち侍りにければ、繕ひ侍るぞ」といつて、紫上の大事がられた三尺の御厨子、一具にこめられた品々や、小さき屋ども（源氏、紅葉賀）は、どんな小さなうつくしい、かはゆいものであつたらう。○かりの子　「あてなるもの」（三九段）の中にも列擧した。古事記仁德の卷に、雁生卵とあるのは、其の文字の如く雁の卵であらうが、萬葉二に「鳥ぐら立てかひし雁乃兒巢立ちなば檀の岡に飛びかへり來ね」の雁乃兒には、古來說がわかれ、契沖の代匠記には、一、鴨の子、二、鷹を古く略して雁と書いたのが、いつしか點を逸したものかとの二說を擧げ、鴨の子說は、源氏花鳥餘情、橋姫の「うちすててつがひ去りにし水鳥のかりのこの世に立ちおくれけむ」の條にも見え、春註、和訓栞等には、西宮記に鴨子をカリノコと訓んでゐると云つて、同じ說である。しかし蜻蛉日記、上に「三月晦日がたに、かりの子の見ゆるを、これ十づゝ重ぬる、いかでせむと、云々」とあるのは、伊勢物語の「とりの子を十づゝ十は重ぬともいかが頼まむ人の心を」とあるのを典據としたもので、雞の子同樣に見扱つたカリノコは、野鴨の卵ではなく、家鴨卽ちアヒルの卵と見るべきであらう。（萬葉の雁の兒は、又別に考ふべき事と思ふ）○舍利の壺　舍利は梵語、漢譯して骨身、又は靈骨と云ひ、普通に佛舍利と云ふ。釋迦の遺骨。今昔物語、卷十一の第一話に、「太子（聖德）のたまはく、塔を起さば必ず佛の舍利を籠め奉るなり。舍利一粒を得、卽ち瑠璃の壺に入れて、塔に安置して禮し奉る」同、第八話に、「彼の唐より持ち渡り給へりける三千粒の佛舍利、招提寺に今に在ましけり」など見え、景雄の說に、「佛舍利を玉の壺に入れたるが、見ゆるを云へるなり。今も多くしかするなり」といつた通りと思ふ。○瞿麥の花　奈良朝の歌人からはじまつて、時代的にも、又個人的にも、

彼は必ずや乳兒の母として、自ら其の愛情を體驗した事のあるものであらう。而も不幸にして其の子には早く別れ、再び子の愛に生きる事の出來なくなつた爲に、それが強く人の子に注がれ、同時に子供の爲には、格別苦勞性になつたのではないかと思はれる。此の側から考へても、清女を冷酷とのみ貶し去るのは當らぬと思ふ。尤も愛するのと弄ぶのとは、一歩のちがひであつて、而も表裏を爲す事が多い。清少のも必ずしも後者でないと斷言する事は出來ぬが、しかし私にはどうしても、彼の女が石女の冷やさ

最も愛玩した花。さればこそ、「草の花は」（五七段）の最初に、「なでし子。唐のは更なり、やまとのもいとめでたし」と書き、赤い扇子を攝つて使つてゐるのを見ても、「なでし子のいみじう咲きたるにぞ、いとよく似たる」（三二段）と、直に聯想されるのである。

通釋　かはゆらしいもの　瓜に書いた乳兒の顏。雀の子が、チユウチユウ鼠鳴をして呼ぶと、飛んで來る樣。又足緒などを付けて、逃げぬ樣にして置くと、親雀が蟲などを持つて來て含めるのは、大層かはゆらしい。三歲ほどの乳兒が、急いで這つて來る道で、小さい塵などのあつたのを目早く見つけて、大層かはゆい指で捉へて、大人などに見せたのは、大層かはゆらしい。髮を尼そぎにしてゐる乳兒が、目に髮のおほひかぶさるのを、手でかきやりはしないで、頭をかしげて物などを見るのは、大層かはゆらしい。着物を襟がけにおさへてある、其の腰の上が白く愛らしげなのも見るとかはゆらしい。大きくはない殿上童の、着飾らせられて歩いてゐるのもかはゆい。愛らしげな乳兒をちよいと抱いて、あやしてゐる中に、くツついて寢込んでしまつたのもかはゆらしい。雛の道具。蓮の浮葉の大層ちひさいのを、池から取りあげて見ること。葵の小さいのも、大層かはゆらしい。何でも彼でも、小さい物は大層かはゆらしい。大層肥えた乳兒の、三歲程なので、色白でかはゆいのが、二藍の薄絹などの長い衣を着て、襟あげてゐるのが、はひ出して來るのも、大層かはゆらしい。八つか九つか十程の男の兒が、兒どもツぽい聲で、書物を讀んでゐるのも、大層かはゆらしい。雛の雛の、足高で白くて愛らしげで、羽がまだ延びぬ爲に、短い着物を着てゐる樣な風付で、ヒヨヒヨとやかましう鳴いて、人の後について歩いて來るのも、又親の側に連れ立つて歩いてゐるのを見るのも、かはゆらしい。家鴨の卵、舍利の壺、瞿麥の花なども、愛らしくうつくしい。

かゝ以て、變態的に子供を愛したものとは考へられぬ。

【參考】　男女ともに經を習ふ事は、此の時代の常例で、更級日記に、「此の頃の人は、十七八よりこそ、經よみ行ひもすれ」といひ、赤染の集には、「横川のかくてう僧都、出でゝおはせしに、四條中納言經ならひにおはしたりしに聞えし、行く方もなくこそ物は悲しけれいかで南をたづね來つらむ」、「かへし、中納言、しみづなば南にとふと見

百三十九段

羨ましきものとして、十三條を擧げた。其の中、二月午の日の稻荷詣に關する條が最も長く、手もよく歌も巧で、物の折毎に重寶がられる人の事が、是れに次ぎ、他はいづれも短く、獨立句の羅列になつてゐる所もあるのは、此の類の他の段と同樣である。

羨ましきもの　經など習ひて、いみじうたどたどしくて忘れ勝にて、返す返す同じ所を讀むに、法師はことわり、男も女も、くるくるとて安らかに讀みたるこそ、あれがやうにいつの世にあらむと覺ゆれ。こゝちなど煩ひて臥したるに、うち笑ひ物いひ、思ふ事なげにて歩みありく人こそ、いみじく羨ましけれ。稻荷に思ひおこして參りたるに、中の御社のほど、わりなく苦しきを念じてのぼる程に、いさかか苦しげもなく、後れて來と見えたる者どもの、唯行きに先立ちて詣づる、いと羨まし。二月午の日の曉に急ぎしかど、坂のなからばかり歩みしかば、巳の時ばかりになりにけり。やうやう暑くさ

ゆれども心は西にかくと知らなむ」といふ贈答が見え、江談抄、一には、時棟者全以不讀經只理趣分許受習淸範也、觀音たゞ觀いんとよむ也、補怛羅山の觀音と云は、常事也、反對側に屬する一笑話さへ傳へてゐる。末摘花の姫君も亦此の類で、「今の世の人のすめる、經うち讀み行ひなどいふ事は、いと耻かしくし給ひて、見奉る人もなけれど、數珠など取りよせ給はず」源氏蓬生といふ風であつたが、何といつても、「讀經し」を「歌うたひ」と對にいつた四五段四四段

へなりて、まことにわびしう、かからぬ人も世にあらむものを、何しに詣でつらむとまで、涙落ちて休むに、三十餘ばかりなる女の、壺裝束などにはあらで、唯引きはこへたるが、「まろは七たび詣し侍るぞ。三度はまうでぬ。四度はことにもあらず。未には下向しぬべし」と、道に逢ひたる人にうちいひて、くだり往きしこそ、ただなる所にては目もとまるまじき事の、かれが身に唯今ならばやと覺えしか。

話釋　○たど〳〵し　辿る樣なるといふ語。覺束なく、不確實な事。○くる〳〵と　スラスラと、澁滯なき樣。○こゝちなど云々　コヽチは氣分。煩ひて」に續いて、病氣などにかゝること。然るに此のコヽチを、榮花、岩蔭の「十四日より御心地重らせ給ふ」の如く、氣分わるきこと、即ち病氣の意に用ひ、更に同、初花の「世の中、こゝち起りて、人もなくなり、哀なる事どものみ多かり」の例の如く、世の中コヽチと續けて、流行の意にも用ひたので、今昔物語、卷二十六、第二十話「女の童、身に病を受けてけり。世の中心地にてありけるや」同、卷十二、第三十五話に、「世の中心地を病むと見えたり」、愚管抄、卷六、「頼家は世の中心地の病にて、云々」など書いた例もある。○稻荷　山城紀伊郡、稻荷山。こゝに鎭坐し給ふ祭神は、宇迦之御魂神（下社）、佐田彥神（中社）、大宮能賣神（上社）の三柱で、外に大己貴神と大年神とを祀つた田中社、若年神、夏高津日神

時代である。信仰と趣味とが等分で、やさしがりといふ世間の風潮に捲きこまれての事、是れが女性の呼び出しにもなつたのは、朗詠や歌うたひと同樣で、更級日記に、「又の年の八月に云々。細殿の遣戸おしあけて見出したれば、曉方の月のあるかなきかにかしきを見るに、香の薫きこえて、讀經などする人もあり、讀經の人は、此の遣戸口に立ちとまりて、物などいふに答へたれば、云々」と書き、定賴卿の經にめでた小式部內侍字治拾遺物語三の如き例は、ザラにあつたものと思ふ。さればこそ、後深草院の辨內

秋比賣神、久々年神の四柱を祀つた、四大神社とを併せて、五社九柱であるが、古くから主祭神三座を重視して、三つの燈火と歌には詠んでゐる。歷代朝野の御尊崇厚く、中にも太政大臣實賴の如きは、「小野の宮の南面には、御簾放ちて出でさせ給ふ事なかりき。其の故は、稻荷の杉のあらはに見ゆれば、明神御覽ずらむに、いかでかなめげにては出でむとのたまはせて、いみじく愼ませ給ふに、おのづから思し忘れぬる折は、御袖をかづきてぞ、驚き騷がせ給ひたる」大鏡、實賴といふ如き例もあり、參拜者の多かつた中にも、二月初午を最とした事は、當社の神が始めて三箇の峰に鎭まりましたのが、元明天皇の和銅四年二月七日、初午の日であつたと、傳へられるからで、稻荷社古今雜實物語貫之家集には、延喜六年の月次屛風の歌の中に、「二月初午、稻荷詣したる所」が詠んであり、世繼の翁の物語の中にも、「二月の三日は初午といへど、甲午最吉日、常よりも世こぞりて稻荷詣にのゝしりしかば、父の詣で侍りし供に、從ひ參りて侍る。さは申せど、幼き程にて、坂のこはきを登り侍りしかば、困じてえ其の日の中に還向つかうまつらざりしかば、父がやがて、其の社の願宜の大夫が後見つかうまつりて、いとうるさくて候ひし宿にまかりよりて、一夜は宿りして、又の日歸り侍りしに、云々」大鏡、古物語とあるので、都人沓至の樣と、女子供にはちよつと日がへりすらも、困難であつた事が知られる。さて實賴傳に所謂稻荷の杉は、更級日記の著者が、夢に「すは稻荷より賜はるしるしの杉よ」とて投げ與へられたもの、いつ頃からか參詣人が、皆それを折つてかへる事にも、なつたので、夫木抄、卷三、稻荷詣の部には、光俊の「きさらぎや今日初午のしるしとて稻荷の杉はもとつ葉もなし」と詠まれてゐる。○壺裝束　市女笠といつて、つばの廣い帽子の如き形した漆ぬりの笠をかぶる。之を市女笠といふ事は、貞丈の說に、市に物賣りに出る女のかぶる笠だからであら

侍日記にも、「月見侍らむとて、（九月十四日）南殿、釣殿などの月御覽ず。かやうの月の夜は、村上、一條院の御時は、若き上達部、殿上人など、今様うたひ、讀經あらそひなど侍りけるに、參りて遊ぶ人のなき、いとこそくちぢしけれ」と書いたのである。

「手よく書き、歌よく詠みて」は、源氏、帝木に、「うち詠み、はしり書き、かい彈く爪音、手つき口つき、たど〳〵しからず」と書いた、其の音樂と共に、女子の才藝の最大要素として、男子の詩歌管絃と對し、當時の教育が此の點に集注された事は、二〇段を見てもわかるが、しかし人にはやはり、才不才があつて、其の段に見える宜耀殿の女御の如きは、多くはなかつたので、道長の室倫子が、其の女の威子中宮の、唐の紙にいと今めかしくなかしく書かせ給へる御筆跡を見て、大層褒め奉り、あまたの女子のいづれも御貌、御髪などの美しく、御手も一所としてわるいお方のないのは、前の世の然るべき因緣ぞと喜んだ事が、榮花物語、歌合の卷には特筆してある。

うと見え、多少の雨はしのげたもので、「えせものゝ所うる折のこと」（一三七段）の中に、「雨降る日の市女笠」を擧げてゐる。而して薄衣といつて、練などの單衣を、被衣（かづき）と同じく頭からかぶり、笠は其の上に着る薄衣の前が左右に開かぬ樣にする爲に、襟を取つて引きあげて折つて、前腰にはさみおくので、之をツボヲルとも、ツボトルともいふのである。（安鄧隨筆、卷十參照）當時婦人が徒歩で外出する時、皆此の裝束をした事は、三〇段にも見えてゐる。○引きはこへたるが　衣服の裾の長いのを、引き返してかきあげるのをいふ。○まろ　男女ともに通じて用ひる、自稱の代名詞。

通釋　羨ましいもの　お經などを習つて、ひどくアヤフヤで忘れ勝で、何度も何度も同じところを讀むのに、法師の覺えのよいのは、職務柄當然として、俗人中、男でも女でも、スラスラと樂に讀んでゐるのは、いつの時に、あの人の樣になるだらうかと思はれる。氣分などがわるいので、寢て居る時に、傍で笑つたり話をしたりし、又は何の苦勞もなささうに、歩いてゐる人が、非常に羨ましい。稲荷に思ひ立つて參詣しましたが、中の御社の邊で、ひどく苦しいのをこらへて上る中に、少しも苦しさうでなく、後れて來ると見えてゐた人達が、ズンズンと先になつて參詣するのは、大層羨ましい。或年のこと、二月午の日の曉に、急いで出て來たのだけれども、坂の半分程を歩いた所で、十時頃になつてしまつた。だん〳〵暑くさへなつて、本當に難儀なので、こんなでない人も、世にあらうものを、どうして參詣をしたらうかとまで思はれ、涙がこぼれて休んでゐると、三十をこしたほどの女で、身輕に壺裝束などをしたのではなく、唯ちよつと着物の裾をひきかげてゐるのが、「私は七度參りをいたしまするワ。三度はお參りしてしまひました。あとの四度は、何でもありませぬ。午後二時には下向してしまひましよう」と、道で逢つた人に話して下つて行つたのは、普通の所では、目にもつくまいと思はれる事だが、此の日はひどく羨ましくて、あの人の身に、唯今かはつてなりたいと思ひました。

男も女も法師も、よき子持ちたる人、いみじう羨まし。髪長くうるはしう、さがり端（はし）などめでたき人。やむごとなき人の、人にかしづかれ給ふも、いと羨まし。手よく書き、歌よく詠みて、物の折にもまづ取り出でらるる人。よき人の御前に、女房いと數多（あまた）さぶらふに、心にくき所へ遣はすべき仰書（おほせがき）などを、誰も鳥の跡などのやうには、などかはあらむ。されど、下（しも）などにあるを、わざと召しで、御硯おろして書かせさせ給ふ、羨まし。さやうの事は、所のおとななどになりぬれば、まことに難波わたりの遠からぬも、事に隨ひて書くを、これさはあらで、上達部のもと、又始めて參らむなど申さする人の女（むすめ）などには、心殊に、紙より始めて繕はせ給へるを、集まりて、たはぶれにねたがりいふめり。琴笛習ふに、さこそはまだしき程は、かれが

やうにいつしかと覺ゆめれ。　内、東宮の御乳母。　上の女房の御方方ゆるされたる。　三昧堂建てて、宵曉に祈られたる人。　雙六うつに、敵の賽ききたる。　まことに世を思ひすてたる聖。

語釋　○男も女も法師も　此の句形は、六二段にも見え、前條にも似た句がある。雙對にいはず、かやうに三疊にいふ事は、一の癖である。さて「よき子持ちたる云々」は、一八七頁を參照されたい。○さかりば　源氏、空蟬の軒端の荻の姿を書いた條に、「髮はいとふさやかにて、長くはあらねど、さかりば、肩のほど、いと清げに、云々」と見え、萩原廣道の評釋に、「額髮の下りたる端の事なり。端をハとのみいふは、軒端、山の端などのハに同じ」と云ふ。○仰書　主上、中宮などの仰を受けて書く文。○鳥の跡　蒙求、卷中に云ふ「淮南子曰、昔蒼頡作レ書、云々、許慎曰、蒼頡始視二鳥跡之文一造二書契一云々」とある故事から出て、文字を云ふ。即ち古今集の序に、「まさきのかづら長く傳はり鳥の跡久しくとどまれらば」は、其の例であるが、こゝは轉じて、同じ文字でも下手で、しどろもどろな樣なのを喩へいふ。源氏、柏木に「あやしき鳥の跡のやうにて、云々」とあるのは、其の例。○御硯おろして　御前の御硯を下げて、お貸し下さつて。二〇段にも、「お硯とりおろして」と書いてある。○所のおとな　中宮御殿などに奉仕する、女房中の頭立つものを云ふ。宰相の君や、作者自身などが、是れに相當する。○難波わたりの云々「難波津に咲くや此の花冬ごもり今は春べと咲くや此の花」といふ歌は、古今序の古註や、和漢朗詠に見え、淺香山の歌と共に、手習ふ人の初にもした事は、古今序の本文に見え、誰でも知るべき筈の歌だといふ事は、二〇段にも出てゐる。それで奉註や評釋などの如く、此の歌の意に據り、手習し始めたばかりの、子供の樣な下手な筆跡と說いても聞えるが、それよりも旁註や通釋に、和泉式部の「筆もつびゆがみて物の書かるるは難波わたりのあしでなるらむ」といふ歌を引いて、惡しといふ事を思はせたのだと、說いたのがよいと思ふ。即ち當時葦手書といふ散らし書の一體が流行したので、式部の歌もそれに惡手（惡筆の意）をいひ懸けたものであるが、さて難波は葦といへば必ず先づ聯想される程の名所であるから、「難波わたりの云々」といつて、惡筆の隱語にしたのであらう。○内東宮の御乳母　御乳母は、禁色（青色、赤色）、尤可二恐思一事歟」と仰せられ、「たゞの女房にてさぶらふ人の、御乳母になりたる」を、「身をかへたらむ人などは、かくやあらむと見ゆるもの」（二一八段）に、雜色の藏人になりたると、並べて書いてゐるし、又一條院の御乳母、藤三位繁子が、主上や中宮と如何にもお心安立な趣は、一一九段に見えるから、共に參照されたい。○上の女房の云々　主上に奉仕する女官で、中宮や女院や、東宮の女御などの御方にも、出入する事を兼ねて許されてゐる者。二〇段に「上の女房のこなた（中宮の御方）許されたるなど參りて」と書いてあるのは即ちそれ。○三昧堂　法華三昧堂の略。念佛三昧の堂を常行堂といふに對する。三昧は梵語で、漢譯して調直定、または正定と云ふ。即ち心の荒きを調へ、曲つてゐるのを直し、心を一所に定めて他に移さず、專心佛道を念ずること。此の時代佛教信仰の盛であつた事は、六五頁にも述べたが、堂を建てる事は、造佛や寫經とは又格別な大事で、容易ではないかはり、其の功德も莫大なので、大福長者の小野宮實賴などは、邸内に三間四面の堂を建て、めぐりの廊は皆供僧の坊にし、わが滅罪生善と、姫君の息災とを祈ら

れたと云ひ、（大鏡の傳）御堂關白道長は、其の祖先昭宣公基經が、藤氏代々の墓地として點定して置いた、木幡に一寺を建て、「我が先祖よりはじめ、親しき疎きわかず、いかで佛になし奉らむ」との心願を起し、此の山の頂を平げさせ、高きを削り、低きには土を置きなどして、建てさせた三昧堂が淨妙寺である。而して其の供養は、寛弘二年十月十九日からで、法華經百部の中の一部は、道長自身の書いたのを讀ませたといひ、（榮花物語、疑）受領ではあつたが、明石の入道などは、裕福であつたから、「行ひをして、後の世の事を思ひすましつべき山水のつらに、いかめしき堂を立てゝ、三昧」行つたと云ふのは、（源氏明石）物語ではあるけれども、亦參照すべきものである。さて草子の文は、祈る自身よりも、小野宮殿の姫君や、御堂殿の祖先の樣に、祈られてゐる人を、羨ましいと見たのである。宵曉は初夜と後夜とで、常にの意に用ひた。○雙六うつに云々　盤雙六で、黑白おの〳〵十二の馬を並べ、二つの賽を竹筒に入れてふり出し、其の賽の目によつて馬を進め、早く敵地に入つたのを勝とする。當時最も流行した遊技で、「つれ〴〵慰むるもの」（一二一段）に、「物語、碁、雙六」と並べ、「つれ〴〵なるもの」（一二〇段）に、「馬おりぬ雙六」を擧げ、一二六段には、此の技に熱中してゐる男の態度が、面白く書かれてゐる。そこに「さはいみじう呪ふとも、うち外してむや」と見えてゐるのは、恰も近江の君が手をおしもんで、「小賽小賽」と祈つた事（源氏常夏）も思ひ出される。伊周も道長も雙六が大好きで、打ちはじめると、裸に腰がらみして、夜中曉までも續けたが、いつも伊周が負けたと云ひ、（大鏡、道隆傳）其の弟の隆家も、道長の爲には、明暮の碁雙六の相手であつた。（榮花、玉の村菊）○まことに世を云々　「まことに」といふ詞を「面白し」と、奉註に評してゐるが、是れは徒然草にも、「ひたぶるの世すて人は、なか〳〵、あらまほしき方もありなむ」（一段）といつたと同じで、誰しも同感であらうと思はれるが、さてかういふ裏面には、兼好の時代はいふまでもなく、淸少の時代にも、表面のみの世捨人が多くて、眞の出家者が少かつた事を思はせるもので、それは「今樣はやすげなり」（五段）と書いた、段などを見ても、よく想像されるのである。

通釋　男でも女でも法師でも、よい子を持つてゐる人は、非常に羨ましい。髮が長くてうつくしくて、額へのかゝり具合などの立派な人。貴い人が、人から鄭重に仕へられなさるのも、大層羨ましい。手をよく書き、歌をよく詠んで、何かの機會毎にも、最初に選び出される人。高貴な方の御前に、女房が澤山侍してゐるのに、奥ゆかしい所へお遣しになる樣な仰書などを、誰も鳥の跡の樣に亂雜に、どうして書きましようぞ。皆相當自信は持つてゐるのですけれども、それらをさし措いて、自分の局に下つてゐるのを、特にお召しになつて、御料の御硯をさげてお貸し下つて、お書かせになるのは羨ましい。さやうな事は、其の處で老女格になつてゐると、本當に惡筆でも、事に由つては機に應じて書くのですが、是れはそれとは異なつて、公卿の所へとか、又始めてお宮仕しましようなどと、人の執次で申し上げさせた人の女などには、格別念をお入れになつて、料紙からしてお見つくろひあそばすのを、それを承つて書いた女房を、憎らしがつて、皆で讒言に事よせて、彼是いふ樣です。琴や笛を習ふのに、未熟な中は、あの人の樣にいつなるであらうかと、さう思ふでしよう。主上や東宮の御乳母。主上方の女官で、中宮や其の他の御方々の所へ、出入を許されてゐるもの。法華三昧堂を立てゝ、宵曉に祈られてゐる人。雙六を打つのに、敵の賽がきいてよい目の出ること。眞實此の世を厭離した僧。

六十三段

（一）内の局を題目として書いたもので、「説經師は」などゝ同じく、何々はの一群として、考へてよい。但し異類の事實を多く並列したのと、唯一題目に局限して書いたのとのちがひがあるから、分けるならば、それでもよい。

（二）中宮が登花殿にいらせられる時に、作者も、其の局に居たので、是れは、其の時の經驗やら感想やらを集めて書いたもの、お局生活の一面が知られて、興味が深い。

【參考】此の登花殿の細殿の前面や、清涼殿との關係は、一一〇段を見ると、よくわかる。それは關白道隆が、黒戸の口から退出するのを、其處の廊に居た作者が、見送りつつ目に入る光景を書いたので、それは即ち、「山の井の大納言、其の次々、さらぬ人々、黒き物を引き散らしたるやうに、藤壺のへいのもとより、登花殿の前まで、居並みたるに、」とあつて、此の段に見える「へい」も、是れと同じい。而して此の藤壺の築土と、登花殿の西側との空地が、語釋にもいつた如く、清涼殿へ參りまかづる殿上人達の通路ともなり、又は殿上に宿直する人達が、局への訪問口ともなつたのである。

さてこゝの「入るべきやうもなくて立ち明かすもをかし」であるが、此の立ちあかし、居あかす事は、女房訪問には珍らしからぬ事うちの局は、細殿いみじうをかし。かみの小蔀あげたれば、風いみじう吹き入りて、夏もいとすずし。冬は雪、霰などの、風にたぐひて入りたるも、いとをかし。せばくて、わらはべなどののぼり居たるも悪しければ、屏風のうしろなどに匿しすゑたれば、異所のやうに、聲高く笑ひなどもせで、いとよし。畫などもたゆまず心遣ひせらる。夜はたましていささかうち解くべくもなきが、いとをかしきなり。沓の音の、夜ひと夜聞ゆるがとまりて、唯および一つして敲くが、其の人なりとふと知るこそをかしけれ。いと久しく敲くに、音もせねば、寢入りけるとや思ふらむと妬くて、少しうち身じろく音、衣のけはひも、さなりと思ふらむかし。扇など使ふもしるし。冬は火桶に、やをら立つる火箸の音も、忍びたれども聞ゆるを、いとど敲きまさり、聲にてもいふに、かけながらすべり寄りて、聞く折もあり。又あまたの聲にて、詩を誦し、歌などうたふには、敲かねどまづあけたれば、此處へとしも思はぬ人も、立ちどまりぬ。入るべきやうもなくて、立ち明すもをかし。

御簾のいと青くをかしげなるに、几帳の帷いとあざやかに、裾のつま少しうち重なりて見えたるに、直衣のうしろに、綻絶えず着たる君達、六位の藏人の青色など着て、うけばりて、遣戸のもとなどに、そば寄せてえ立てらず。へいの前などにうしろ押して、袖うち合はせて立ちたるこそをかしけれ。また、指貫いと濃う、直衣のあざや

で、是れが却つて、晝と夜とを逆にして居た樣な、平安朝の鮮豪の常態であつた。「殿上人日毎に參り、よるも居あかして、物いふを聞きて」（一四二段）と書いたのは、中宮が太政官の朝所に出御中の事であり、兵部と權中將とが、曉までいひ明かしたのを笑つたのは、一條院での事であり（二五二段）「夜中曉ともなく、門いと心がしこくもなく、何の宮、內わたりの殿ばらなる人々の、出であひなどして、格子などもあげながら、冬の夜を居明して、人の出でぬる後も、見出したる事こそをかしけれ。笛など吹きて出かにて、いろいろの衣どもこぼし出でたる人の、簾をおし入れて、なから入りたるやうなるも、外より見るは、いとをかしからむを、いと清げなる硯ひき寄せて、文書き、もしは鏡乞ひて、鬢など搔き直したるも、すべてをかし。三尺の几帳を立てたるに、帽額の下は、唯少しぞある。外に立てる人と、內に居たる人と、物いふ顏のもとに、いとよくあたりたるこそをかしけれ。丈のいと高く、短からむ人などやいかがあらむ。なほ世の常のは、さぞあらむかし。

語釋　○細殿　弘徽殿、登花殿の西の廂の細長き所で、之をしきつて女房の局にあてた。聞每に遣戸がついてをり、之を出入口にした。紫式部日記に、「細殿の三の口に入りて臥したれば」とあるのは、源氏の君が忍び入つて、朧月夜の內侍と會はれたのと同じく、弘徽殿のであり、本書の「此の三月晦日、細殿の一の口に、殿上人あまた立てりしを」（一四四段）や、細殿の遣戸いと疾う明けたれば、御湯殿の馬道より、おりて來る殿上人の云々」とある細殿も、大內裏圖考證には、同じく、弘徽殿のとしてゐるけれども、中宮の御在所が登花殿であつた關係上、此の方であらうと思ふ。尤も弘徽殿の女御（藤原義子）の入內前は、こちらをもお使ひになつたと考へられぬ事はない。○かみの小蔀　端蔀の條（一二六頁）に解いた。是れは其の形の小なる物。あげるのは上の半分で、下

でぬるを、我は急ぎても寢られず、人の上などもいひ、歌など語り聞くまゝに、寢入りぬるこそをかしけれ」（一五六段）といつたのは、里邸での事であり、かかる例は枚擧に遑がない。

また實方朝臣集に次の樣な歌が見え、こゝの趣に似てゐるから、掲げて參考に供する。

格子のつらに一夜ゐあかして、あしたに同じ人にあけがたきふたみの浦による波に袖のみぬれし沖つ島人

內の格子を夜一夜ならすを、女さなりとは聞きながら、心知らぬ人にはめたり外したりするもの。こゝは、下方は其のまゝである事を、示す爲にかういつた。○沓の音の云々　清涼殿へ上り下りする殿上人などが、絕えず其の前を通行するからで、紫式部日記に、「十二月の二十九日に參る。云々。夜いたうふけにけり。云々。前なる人々の『內わたりは、なほいとけはひ異なりけり。里にては、今は寢なましものを、さも寢ざとき沓のしげさかな』と、色めかしくいひ居たるを聞きて」とあるのも、是れである。○扇など云々　是れはいはずして、夏の事と知らせたので、下の「冬は云々」といふのと、對せしめた文法。○かけながら　春註には、カゲと濁り、內より物陰によりて、其のさまを聞く意に解いてゐるが、賓臣は、カケは清音で、戶の懸金はかけたまゝと說いた。此の方がよいと思ふ。○入るべきやうもなくて　前の忍んで此の局へ來た人に、かけて見るべきである。○御簾のいと青う　四月一日の更衣に、懸けかへられたのをいふ。○几帳のかたびら云々　是れも同樣で、建武年中行事に、「四月一日、御衣がへなれば、所所の御裝束あらたむ。御殿、御帳のかたびら、おもて生絹に胡粉にて、繪をかく。壁代みな撤す。夜の御殿も同じ。云々。疊同じ。褥かはらず」とある。「あざやかに」は、新らしいのを云ふ。○直衣のうしろに云々　うしろに綻のきれたのも知らずに着てゐる、輕躁な人。○君達　六八頁にも見えるが、こゝのはそれと異なり、二一四段に、上達部に對していつたのと同じく、殿上人の意に見るがよいと思ふ。○青色　天子御料の麴塵の御袍。黃青色に、桐竹、鳳凰、唐草、鳥などの紋樣がある。之を山鳩色とも、又青色とも云ひ、藏人は之を拜領して着用するといふ、一大光榮を有したのである。○うけばりて　引き受けて專らにする意の語で、得意にして憚る事なき樣なるに云ふ。○へい　塀。築土とも、築垣とも云ふ。此の築垣は藤壺ので、登花殿の前方。くはしくは參考に說い

て、あらく問はせたれば、音もせでかへりにけるあしたに

あかぬ夜の心ながらにやみにしをあまえてとひし聲は聞きや

返し

ひとりのみ木の丸殿にあらませば名のらでやみにかへらましやは

臨時祭は五節と共に、冬季に於ける佳人才子が興味の中心であつたので、（一五頁、參照）それには當然、調樂試樂などの、夜を重れて行はれたのにも由るのである。さて是れに對する局住の女房の感想の一端は、此の段にも見えるが、一方また、男の調樂くづた。○うしろ押して　春註に、「簾によりゐしさまなり」といつたのを、美隆の私記には、後をしてであらう。後押してではあるまい。源氏、蜻蛉に、「たゞ此の障子に、うしろしたる人、云々」とあるのは、其の例だと云つてゐるのは一說たが、源氏、常夏に、「みな涼しき勾欄に、せなかおしつゝ侍ひ給ふ」と云ふ例もあつて、一概にはいへぬ。それで今は舊說に隨ふ。○いろいろの衣ども云々三段や二〇段等に見える、出袿（いだしうちき）のこと。普通の場合は、衣（袿）を着、指貫を穿いて腰を結ひ、其の上に直衣を着るのであるが、五節又は晴の時には、其の出さうと思ふ衣を、指貫の上に着て、それから更に直衣を着るので、其の美しい袿の裾が、直衣と指貫との間からこぼれて見えるのである。是れは一段よそほひをつくらふ時の事であつて、指貫の傍を取つて歩く時、出衣が前にある樣にするのだと云ふ。（雅亮裝束抄、世俗淺深秘抄上、服飾雜、見、卷十一、貞丈雜記、卷五等、參照）　○帽額　簾の上邊に横につける一幅の布帛で簾の外にあり、内にはかゝらぬと、貞丈は云ふ。（兩端及び下部にも、同じ布帛を細くしてつける）　帽額はもとハチマキの事で、簾の上邊にあてるからの名と思はれる。貞丈の出て入る人の額の上におほふ故の名だといつたのは、いかゞであらう。なほ又同じ人の說に、朋黃色の絹に、黑く染めたのを、俗にもつかう絹と云ふと云ひ、人の家の紋にも

此の如くなる紋をいくらもつかうといふのも、是れから出たといつて、一つ物に定まつてゐたかの如くに見えるが、（貞丈雜記、卷十四に據る）現に紫式部日記の五節所の事を書いた條に、簾のはし、帽額さへ、心々にかはりて」とあつて、それ〴〵意匠を交へたのは、五節所のみには限らなかつたらうと思ふ。○外に立てると云々　こゝの趣は、帽額の簾の内側に、三尺の几帳が立てゝあつて、其の所に女がゐる。而して簾の外方に男が居て、簾を隔てゝ立話をする場合の事で、上は帽額に妨げられ、下は几帳が邪魔をしてゐるのであるが、丁度都合よく、

れが、いろ〳〵の方面に發展したので、馬頭が「臨時の祭の調樂に、夜ふけていみじう霙降る夜、これかれまかりあかるる所にて、思ひめぐらせば、なほ家路と思はむ方は、又なかりけり。内わたりの旅寢も、すさまじかるべく、氣色ばめるあたりは、そゞろ寒くやとの考へから、日頃無沙汰の指食女をたづねる事になつた如きも、其の一例と見るべきである。（源氏、帚木）

なほ又、此の風俗荒田を歌ひかへたのが、敦實親王の子で、音律の道に明かであつた、源左大臣雅信だと云ひ、何事につけても、一條院の御二人の顏と顏との相對する所が、簾の透いて見える部分にあたると、云ふのである。だからひどく長の高い人なら、顏が帽額のかげになり、又低すぎると、几帳の下に隱れてしまふだらうと、妙な想像を逞しうした。

通釋　宮中のお局は、細殿が非常に興味がある。上の小蔀をあげて置くと、風がひどく吹き込んで、夏も大層涼しい。冬は雪や霰などが、風と一緒になつてはひるのも、大層おもしろい。狹くて、里邸から童女などが上つて來てゐるのも、客でもあると都合がわるいから、屛風の後などに匿して置くと、子供も遠慮して、外の所の樣に、聲高く笑つたりなどもしないで、大層よい。晝なども、油斷なく注意される。夜はまして、少しも氣のゆるせないのが大層おもしろいのです。沓の音が一晩中聞えるのが、自分の局の前でとまつて、唯指一本で戸を敲くのが、あの人なのだナと、ヒヨツとわかるのがおもしろい。大層久しく敲くのに、こちらはジツとしてゐて音もせぬから、先方では、寢込んでしまつたと思ふだらうかと、それも憎らしくて、少し身動きをする音や、衣ずれの樣子も、アヽ起きてゐるのだナと、思ふでしようワ。外で扇子など使ふのも、よく聞える。是れは夏の事ですが、冬は火桶にソウツと立てる火箸の音も、密にするのだけれども、外に聞えるので、いよ〳〵ひどく敲き、聲でもあけてくれよといふので、懸金はかけたまゝで、靜に端まで出て行つて、樣子を聞く事もある。また大勢の聲で、詩を朗詠したり、歌などをうたつて通りかゝる時には、戸を敲かぬけれども、こちらから釣り出されて、先づあけると、此處へ來ようとも思はぬ人も、立ちどまつてしまふ。それですから忍んで來てゐた人も、中にはひりやうもなくて、立話をしながら、夜を明かすのも面白い。

代はすぐれてゐて、延喜天暦に次ぐ理想的の御代であつたと、世繼の翁なども考へてゐたらしい一話が、大鏡、古物語に出てゐる。

御簾の新に懸けかへられて、大層青く綺麗なのに、几帳の帷も大層新しくて、其の陰に居る婦人の衣服の裾が、少し重なつて見えてゐるのに、外の方には、直衣の後にいつも綻のきれたのを着てゐる殿上人や、六位の藏人で、拜領物の麴塵の御袍などを着て、無遠慮に、遣戸のそばに、半身を寄せてよう立つといふ樣な事はしない。後方の築土の前などに後をつけて、袖を合せてかしこまつた風で、立つてゐるのが面白い。また大層濃い紫の指貫を穿き、直衣の新しいのを着て、いろ〳〵のうつくしい袿の裾なんかを、直衣の下からのぞかせてゐるといふ、しやれた姿の人が、局の簾を少し中へおし込んで、半身入り込んでゐる樣なのも、外から見ると、大層おもしろからうが、其の男が、大層綺麗な硯を手許に引き寄せて、文を書き、又は鏡を借りて、鬢などをかき直してゐるのも、全體おもしろい。女の傍には、三尺の几帳が立てゝあるので、それと、其の前面に垂れてある帽額の簾の下とは、ほんの少しの透がある。簾の外に立つてゐる男と、內に居る女と、立話をする顏のそばに、其の透いてゐる部分が、大層よくあたつてゐるのが面白い。身長の大層高いのや、低いやうな人は、どうであらうか。やはり普通の身長の人は、前にいつた樣な風でありましようワ。

まして臨時の祭の調樂などは、いみじうをかし。殿守の官人などの、長き松を高くともして、首はひき入れて行けば、先はさし付けつばかりなるに、をかしう遊び、笛吹き立てて、心殊に思ひたるに、君達の日の裝束して、立ちどまり物いひなどするに、供の隨身どもの、前を忍びやかに短く、おのが君達の料に追ひたるも、遊にまじりて、常に似ずをかしう聞ゆ。夜更けぬれば、なほあけて歸るを待つに、君達の聲にて、「あら田に生ふるとみ草の花」と歌ひたるも、この度は、今少しをかしきに、いかなるまめ人にかあらむ、すくずくしうさし歩みて出でぬるもあれば、笑ふを、「しばしや。など、さ夜をすてて急ぎ給ふ。とありて」などいへど、心地などや惡しからむ、倒れぬばかり、もし人や追ひて捉ふると見ゆるまで、惑ひ出づるもあめり。

語釋　○臨時の祭　石清水のが三月中の午の日、午が二の時は、下の午を用ひられる。賀茂のが十一月下の酉の日。元あつた祭禮の外に、後に起されたものだから云ふ。こゝのは下に、「首はひき入れて行けば」とあつて、春註にも、「寒き夜の體にや」と、いつたのがよいと思ふから、賀茂のと定める。○調樂　舞樂を調習すること。政事要略、卷二十八、下酉賀茂臨時祭事の條に、藏人式を引いて、「賀茂臨時祭前三十日、藏人頭於御前定使一人、並舞人十人、陪從十二人、註略及其裝束可調進之人々、其後擇日次、於樂所調習歌舞、毎調習之日、內藏寮設酒饌、臨昏黑時、主殿寮擎炬火、云々（中略）前三日、云々、舞人陪從、自北戸參入、歌舞畢樂所當日賜使御衣」と云ひ、御堂關白記、長和五年十月二十九日の條に、賀茂臨時祭調樂初とあり、同書にはないが、其の年の十一月下酉は二十一日に當るから、約

二十日間になる。而して同書、寛弘三年十一月二十日己未の條に、臨時祭試樂とあり、祭前二日である。是れは石清水臨時祭の時も、同樣であつたらうが、それは江家次第、卷六の其の條の註に、「試樂前三十日調樂、先二日試樂」（年中行事秘抄の文）とあり、御堂關白記、寛弘二年二月二十三日の條に、於馬場殿初調樂」とあり、それから三十日、二月四日等に調樂があり、三月六日に試樂があつて、上達部を召し、同二十日にも試樂があつた事が書いてある。祭は二十二日であつたから、祭前二日に當り、調樂を祭前三十日といつたのとも一致する。されば凡そ一個月の間に於て、然るべき日を選んでは內々練習し、中間でも御前の試演があつて、殿上人なども召されたもので、之をも試樂といつた事がわかり、場所は樂所（朔平門內、桂芳坊に置かれた）馬場殿其の他便宜の所を以て、是れに充てられた事と思ふが、本書のは清涼殿であり、而もよほど大げさであるから、主上も御覽になつた試演と思はれるが、中間的の催しだから、やはり調樂といつたのではあるまいか。○殿守の官人　主殿寮の下官。寮は供御の輿輦、蓋笠、繖扇、帷帳、湯沐等の事から、殿庭を洒掃し、兼ねて燈燭、松柴、炭燎等の事をも掌るから、ここは松明を照しつゝ先導するので、前に引いた政事要略の文に、「臨昏黑時、主殿寮擧炬火」とあるのに當る。○君達の云々　こゝの君達は、下文と對照して、名家の子弟の若い公卿を云つたのであらうと思ふ。後の君達は、主人といふ程の意。而して北の陣（朔平門にある）を入つて皇居內になつてからも、前を拂ふ例は、大鏡、道隆傳にも見える。○なほあけて歸るを　夜が明けて人々の退出するのを、見ようと思つて待つてゐる。古本に「あけながら」とあるのは、局の戶をあけたまゝの意で、是れもわるくない。○あらたに生ふる云々　風俗歌、荒田の句。此の下が、「手につみれて、みやへまるらむ、なかつたえ」といふので、荒田と文字には書くが、新田であらう。又「とみ草の花」は、神樂歌、閑野に、「しづやの小菅、鎌もて刈らば、生ひむや小菅天なる雲雀、よりこや雲雀、とみ草（くひ、古）もちて」、榮花、日かげのかづらの卷に、大菅會悠紀方、樂の急の歌に金山を、輔親が「かな山にかたく根ざせるときは木の數に生ひます國のとみ草」など詠み、「とみ草」は、眞淵は、山にある一種の草だらうといつてゐるが、やはり舊說の如く、稻と見たい。辨內侍日記、建長二年十一月の五節の事を書いた條に、「ものざねに爲氏、云々。皆むれ立ちて『あらたに生ふるとみ草の花』おもしろく歌ひて、田植のまねしたり。何にもすぐれて、殊におもしろく見え侍りしかば、辨內侍、『君が世になびかぬ草はあらじかし風になみよる小田の早苗は』と見え、當時稻としてゐたのだから、今も是れに從ふべきである。又「なかつたえ」の「え」心得がたしと、眞淵はいつてゐるが、萬葉緯、第九、風俗部に出した、此の歌の末は、美也戶萬伊良宇也、加川多戶とあり、且給と解いてゐるから、是れに隨へば論はない。○すくずくしう　直々しうで、サツサツと行く形容。○しばしや云々　殿上人が、後から呼びとめていふとも、解されぬではないが、なほ局で見てゐる人の言であらう。○とありて　暫く居つて行けの意。

通釋　まして賀茂の臨時祭の調樂の時などは、非常に面白い。主殿寮の官人などが、長い松明を高くともして、寒いものだから、首を縮めて襟の中にひつ込めて行くから、先をば物にさしつけてしまひさうになるのだが、清涼殿の方では、面白い奏樂の聲がし、笛をば吹き立てゝ、格別な感じがしてゐる時に、君達の束帶姿でやつて來られたのが、局の前で立ちどまり、話などをされるのに、やがて供の侍などが、前拂の聲を忍びやかに短く、自分の主人の爲に顯けたのも、奏樂に混じて、常とはちがつて面白く聞える。夜が更けてゐるから、なほも夜が明けて、人々の退出されるの

を待つてゐると君達の聲で、「あら田に生ふるとみ草の花」と、風俗歌をうたはれたのは、今度は今少し興味があるのに、どうした生眞面目な人なのだらうか、サツサと歩いて歸つて行くのもあるから、女房達は見てゐて笑ふと、或一人が、「もうしばらくいらつしやいよ。どうしてそんなに、此の面白い夜をすてゝ、お急ぎになるのですか。もう暫く居つていらつしやい」などといふけれども、氣分などが悪いのだらうか、倒れてしまふ程に前のめりをし、或は人が追つて來て捉へられるので、それを恐れて逃げるのかと思はれるまで、あわてゝ出て行くのもある樣です。

五十七段

（一）純粹の何々はづくしの一段を取つた。而して此の類のものも、分ければ、天象、地理、人倫、歳時、動植、器物等になるので、恰も古今和歌六帖の題目のやうであり、歌人の好參考ともなるが、同時に作者自身に取つても、なるほど手控、卽ち枕草子であつたかの觀がある。是れに對するものはづくしは、多く感覺的のもので、六帖でいへば、戀や雜思に相當する。而して流布本系統の本には、是等と日記的の部分とが、殆ど次第順序もなく、前後入り交つてゐり、異本系統のものでは、それが類聚的になつてゐる。

（二）二十種近い草花の品評がしてあるが、秋季のが大部分を占めて居り、春に於て、菫一種、夏に於て、夕顏、薔薇、唐葵の三種、冬のは一種もない。以て作者の趣味を知る事が出來るが、實は是れが奈良朝以來、歌人共通のものであつた。

草の花は　なでしこ。唐のは更なり、倭のもいとめでたし。女郎花。ききやう。菊の所所移ろひたる。刈萱。龍膽は、枝ざしなどもむつかしげなれど、こと花みな霜枯れ果てたるに、いと花やかなる色合にてさし出でたる、いとをかし。わざと取り立てて人めかすべきにもあらぬさまなれど、かまつかの花らうたげなり。名ぞうたてげなる。雁のくる花と、文字には書きたる。かにひの花。色は濃からねど、藤の花にいとよく似て、春と秋と咲く、をかしげなり。壺菫。菫。同じやうの物ぞかし。おひていけば同じなどうし。しもつけの花。夕顏は朝顏に似て、いひ續けたるもをかしかりぬべき花の姿にて、にくき實の有樣こそ、いとくち惜しけれ。などてさはた生ひ出でけむ。ぬかづきなどいふ物のやうにだにあれかし。されどなほ、夕顏といふ名ばかりはをかし。葦の花、更に見所なけれど、みてぐらなといはれたる、心ばへあらむと思ふに、ただな

【參考】山上憶良の「萩が花尾花葛花なでしこの花女郎花また藤袴朝顏の花」は、七草の歌として名高いが、此の中の葛花を女郎花の下に移すと、其の愛の順序が、恰も此の並べ方と同じになるのである。萩の歌が萬葉集中、花の部で最も多い事は、人の知る所であるが、同時に「人皆は萩を秋といふよし我は尾花が末を秋とはいはむ」（萬葉、卷十）といふ歌もあつて、部分的に見てのみ引き立つ萩に比しては、尾花が末のはるゝ〳〵と靡き立つてゐる景色が、秋の野の大觀として、特筆されねばならぬ。此の尾花ガウ

レは、後世尾花ガスヱとなつて、秋野の描寫に最も必要な成句となつたのも、是れが爲であり、清少の薄に力を入れたのも、亦この點にある。枯尾花には亦無限の寂寥味があつて、「狐火ももえつくばかり枯尾花」（蕪村）といふ如き、一種の幻妖味までを感ぜしめるが、清少のは白髮の衰翁に喩へたので、是れ亦然るべき思ひ付である。

源氏、寄生に、「がれんくなる前栽の中に、尾花のものより殊に手をさし出でて、招くがをかしう見ゆるに、まだ穂にいでさしたるも、露を貫きとむる玉の緒はかなげに打靡きらず。萠えしも薄には劣らねど、水のつらにて、をかしうこそあらめと覺ゆ。

語釋　○なでしこ　漢名瞿麥、普通撫子と書き、名義もそれだらうと云ふ。萬葉に石竹を宛て、今もセキチクといふ地方がある。○唐のは更なり云々　唐土から舶載したもので、花壇に培養する。野生で紅淡色の花をつけるものは、元からわが國にあつたので、唐のが渡つてから、必要のある場合は、ヤマトを冠して、それと區別した。萬葉では嬬人に喩へ、平安朝に來ては幼子に懸け、又一名をトコナツ（常夏）ともいふから、トコ（床）にいひ懸けて、詠んだ歌も多い。○女郎花　漢名の敗醬は、その花の臭氣から來たので、和名のヲミナヘシは、美色女をも壓す意かと云ふ。萬葉以來女に喩へ、又女其のものにして詠んだ、擬人法の歌が多い。○ききやう　漢名桔梗。箋註和名抄に、李時珍の說を引き、此の草の根が結實して、枝が梗直であるからの名だと云ひ、和名は、新撰字鏡に、アサガホ、又云ふ、ヲカトドキ、本草和名、和名抄等には、アリノヒブキ、一名ヲカトドキとあるけれども、それは用ひられないで、漢名のまゝキチカウ（漢音）又はキキヤウ（呉音）といひ、古今集の物名をはじめて、古くは主としてキチカウで、キキヤウの隱題に、俊頼の「あやまたぬ花の都をおのれからうききやう（憂き京に、キキヤウをいひかく）なれと思ひけるかな」（散木集雜下）が確にキキヤウと詠んだものの初ではないかと思はれ、隨つてこゝもキチカウでありさうだけれども、春註本、古本、前田本等、いづれもキキヤウとあるから、今は其のまゝにした。○菊の云々　白菊が末になつて、所々紫色のシミの出たのを、移菊といつて更に賞翫したので、「秋をおきて時こそありけれ菊の花うつろふかなど、例の事なれどなほ哀なりかし」とあつて、前栽には、薄も重要な材料であつた事がわかり、實方朝臣集の詞書に、「清涼殿の御前の薄を結びたるを、誰がしたるならむといひて、内膳の命婦の結びつけさせける」や「れたきもの」（八二段）の中に、「おもしろき萩薄を植ゑて見る程に、長櫃もたるもの、鋤など引きさげて、唯掘りに掘りて去ぬるこそ、わびしう妬かりけれ」などあるに據ると、清涼殿の御前や、女房の局先などまでに植ゑて、愛玩された事がわかり、全然常は雜草あつかひで、月見の時にばかり持ちらに色のまされば」（古今、秋下、平貞文）など詠み、衣服の襲などにも之をうつした。○刈萱　萱の一種で、葦に似てゐる。古今集、俳諧に、「まめなれど何かはよけく刈萱の亂れてあれどあしけくもなし」と詠まれてより、歌には多く亂るゝ趣にのみ詠むが、源順集に、「或所の前栽合の歌の判ある所に、男女方わきて、御前の庭の薄、荻、紫蘭、紫苑、草の香、かるかや、撫子、萩など植ゑさせ給ひ、云云」と見え、他の秋草と共に、前栽物の一であつた事がわかり、源氏、野分には、夕霧大將が、「吹き亂りたる刈萱に」歌つけて、贈つた由が書いてある。○龍膽　新撰字鏡には、タツノキグサ又はヤマビコナと訓し、和名抄には、エヤミグサ、一に云ふニガナとあり、疝おとしの藥になるといふ事だが、やはり一般には漢名を通用し、古今集の、我が宿の花ふみしだくとりうたん野はなければやこゝにしも來る」（物名友則）を初めとして、古今六帖、拾遺集等、いづれもリウタンといつてゐるが、それが更に、和泉式部集の「りんだうの花とも人を見てしがな枯れやはしつる霜がくれつゝ」の如く、音便でリンダウとなり、順集にはリウタウとも詠んでゐる。○枝ざしなども云々　枝と葉はこはくて笹に似てゐるから、むつかしいといつたのであらう。○人めかす　「花めかす」といふに同じく、外の花なみに、特にとり立てゝ書くべきでもないとの意。○かまつかの花　今川了俊の言塵集、卷四に、「かまつかの花とは、雁來花と書けり。清少納言枕草子に云ふ。春の末夏なり。秋初に花の咲くと、云々。葉も花もゐんどうに似たり」と云つてゐる。春註以下、雁來紅（今いふ葉鶏頭）の事であらうといふのは、草子に說明してある用字からの思ひ付で、濱臣は更に、其の語原は鎌柄の義で形狀から名づけたものであらうと云つてゐるが、どうもさうではないらしい。又鹿持雅澄の古語譯通、ツキグサの條に、「今の俗、國によりホタルグサ、或はカマヅカ、或はアヲバナ、或はチグサな

出される今日とは、非常な相違といはねばならぬ。

撫子は「うつくし、きもの」の最初に書いたので、其の段で多少述べておいたが、花山院は風流者で、建築にも作庭にも通じてゐられたが、中にも此の撫子の種を、築土の上にお蒔きになつたから、思ひかけず四方に、唐錦をひき懸けた樣に咲いたと云ひ、（大鏡、伊尹傳）大納言公任も亦、前庭に撫子を植ゑたといふ。（榮花、もとの滴）なほ又下に引く斷の例に據り、笹をあしらつて、景色を添へた事もわかるのである。

どゝいへり」といつて、月草にカマヅカの一名ある事を敎へてくれたが、此の月草だとすれば、言塵集の說明によほど近くもなる。○かにひの花　拾遺集、物名に伊勢の「かにひのはな」を詠んだ歌が見え、春註には雁緋なりといふ。但し普通の雁緋は、藤の花にも似ず、春秋にも咲かぬといつてゐるが、草花譜に據れば花に五種あつて、春夏秋冬、時を以て名づける。（剪春羅、剪夏羅など）春夏の二羅は、黃紅で佳ならず、秋冬のが深紅色で、美しいと云ひ、卽ちこゝに春と秋と咲くと云つたのは、一類別種で、剪夏羅と剪秋羅とを一にして云つたのである。なほ又、白石の東雅に、藤（フヂ）は、フシと云ふ語の轉である。フシは剪春羅、剪秋羅の別植であり、色には雪白、赤色、薄紫などがあるといふ。（以上古名錄に據る）兎に角こゝに書いた事も大體見當がつく。○壺菫　萬葉八に、「山吹の咲きたる野べのつぼすみれ此の春雨にさかりなりけり」と見え、舊說の如く、其の花のつぼむが如き形をしてゐる點から見て、歌などに、七音にいふ場合、冠したもので、菫も一つ物であらうと思はれ、八雲御抄に「つぼすみれ、又只すみれ」と云つてあるのも、同樣の御見解であらう。但し裝束の色目の菫、壺菫は、別類であり、（櫻花抄）本書のも二種にわけてはゐるが、是れは單に名が二つあるからの事で、必ずしも葉の丸いのと長いのとで、分けたと云ふ如きものではあるまい。なほ又、景樹の菫の說（桂園遺文）には、スミレは今云ふレンゲのこと。「同じやうのものぞかし」とあるのは、カニヒノ花からかゝつたもの、下の菫は衍文で、さる本もある（古本がそれ）といつてゐる。此のレンゲ說は、首肯しかねるが、他の部分は必ずしもわるくない。○おひていけば云々　旁註に生ひ育ち行けば、同じ樣にいふけれども、それは心うしの義だといふが、やはり春註のいふ如く、義が通ぜぬ。或は「おいて」の假名に從ひ、老いゆく意に見る說もあるが、是れも十分とは思はれぬ。いづれにしてもこゝは、

又乾の方の別院（法成寺）の上（倫子）の御前の御堂の方にゐて參りたれば、南の方には、唐撫子をさながら植ゑさせ給ひ、まぜ結はせ給へり。濃くうすくうつろひたる程、めでたし。（榮花、玉臺）

お前に（六條院なる玉葛の方）みだりがはしき前栽ども植ゑさせ給はず、撫子の色をとのへたる、からの倭の、ませいとなつかしく結ひなして、咲き亂れたる夕ばえ、いといみじう見ゆ。皆立ちよりて折り取らぬを、あかず思ひてやすらふ。（源氏

何かの誤だらうと思ふが、古本には此の一句がないから、是れに從へば、問題はなくなる。○しもつけの花　繡線菊。葉は葡萄に似、初夏女郎花に似た紅紫色の細花を簇發する。○夕顏は云々　花が朝顏に似て、歌などに詠み續けても、面白かりさうな花の姿だといふ。○にくき實　大きな瓜がぶらり〳〵となるから。此の花は、源氏、夕顏に書かれてから、一入歌人の興味をそゝるものとなり、淸少の斯樣に見た實も亦、源俊賴には、「山がつのすとか竹垣枝もせに夕顏なれりすがみ〳〵に」（散木集、夏）と詠まれて、一かどの歌材となつた。○ぬかづき　ホホヅキのこと。新撰字鏡、草部に、酸漿に註して、加我彌吾、又奴加豆支とあり、黑川博士の說の如く、下を向いて垂れてゐる樣の、愛らしいからの名であらう。○みてぐらなど云々　春註に、「御幣なり、葦の花のさま、御幣に似たればなるべし」といひ、旁註には、信濃の御射山祭に、葦の穗で幣を作り、之を「葦の花のみてぐら」と云ふと見える。此の御射山祭に、薄で神殿を造り、祭の程は、人の屋をも薄で皆造ると、藻汐草にも云ひ、木曾路名所圖繪によれば、每年七月諏訪の神が御射山に狩に出でますので、其の時神主等が其の狩屋を作り、薄で葺く事があり、之を穗屋の神事と云ふとあつて、薄を此の神事に用ひる事は知られるが、御幣とは緣が遠い。是れは又、格別な故事でもあらうと思ふが、詳ならぬ。○水のつら　ツラは表面のこと、又はそのほとりの事を云ふ。こゝのは後の方の意。

通釋　草の花は、なでしこ。唐の撫子はいふまでもない。倭のも大層結構である。女郎花。桔梗。菊の所々變色したのもよい。刈萱。龍膽は、枝つきなどもこはくてわづらはしいけれども、他の花が皆霜枯れきつてしまつてゐるのに、大層うつくしい色合で咲いてゐるのは、大層おもしろい。特に取り出して、外の花並に書くべきでもない花の樣ではあるけれども、かまつかの花は愛らしい趣

（當夏）

龍膽も亦庭に植ゑたので、源氏に「枯れたる下草の中に、龍膽、撫子などの咲き出でたるも、折らせ給ひて、中將の立ちぬる後に、わが君の御乳母の宰相の君して、云々（葵）「りんだう、朝顔のはひまじはれるませも、皆散り亂れたるも、とかう引き出でたづぬるなるべし」（野分）などの記事があり、殊更に晩秋の山里の叙景などには、最も有効なので、夕霧の大將が九月十餘日に、小野の山里を訪はれた條には、次の樣に書いてある。

叢の蟲のみぞ、より所なげに鳴きよわりて、枯れたる草の下より、りんだうの我ひとりのみ心長うはひ出でて、露けく見ゆるなど、みな例の此の頃の事なれども、折から所がらにや、いと堪へがたき程の物悲しさなり。（夕霧）

がある。名が變だ。雁の來る花と、文字には書いてゐる。かにひの花もよい。此の花は、色は濃くはないけれども、藤の花に大層よく似て、春と秋とに咲く、これが大層おもしろい趣である。菫、壺菫は、同じやうのものである。生ひ立つて行けば、同じになるなどいふのはいやだ。しもつけの花。夕顔の花は、朝顔に似て、歌などに詠み續けてあるのも、面白かりさうな花の姿であるのに、にくい大きな實の形は、大層遺憾である。どうしてそんな風にまた、此の草が生れついたのだらう。酸漿といふ物のやうにでもあれよ。けれどもやはり、夕顔と云ふ名だけは興味がある。葦の花は、一向に見所がないけれども、御幣などといはれてゐる、それ相應の趣はあるだらうと思ふと、平凡ではない。芽を出した所も、薄には劣らないけれども、是れは又水の際で、興味があらうと思はれる。

これに薄を入れぬいとあやしと、人いふめり。秋の野のおしなべたるをかしさは、薄にこそあれ。穂先の蘇枋にいと濃きが、朝霧に濡れてうち靡きたるは、さばかりの物やはある。秋のはてぞ、いと見所なき。いろいろに亂れ咲きたりし花の、かたもなく散りたる後、冬の末まで、頭いと白く、おほどれたるをも知らで、昔思ひ出で顔に靡きて、かひろぎ立てる人にこそ、いみじう似たれ。よそふる事ありて、それをしもこそ、哀とも思ふべけれ。

萩はいと色深く、枝たをやかに咲きたるが、朝霧に沾れて、なよなよと廣ごり伏したる。さを鹿の分きて立ちならすらむも、心ことなり。唐葵は取りわきて見えねど、日の影に隨ひて傾くらむぞ、なべての草木の心とも覺えでをかしき。花の色は濃からねど、咲く山吹には。岩躑躅も殊なることなけれど、「折りもてぞ見る」と詠まれたる、さすがにをかし。薔薇は、近くて、枝の樣などはむつかしけれどをかし。雨など晴れ行きたる水のつら、黒木のはしなどのつらに、亂れ咲きたる夕映。

語釋　○おしなべたる云々　おしならしたとか、一般にとかいふ義の語であるが、こゝは寧ろ秋野の大觀とでも、譯してよい樣な義に用ひた。○おほどれたるを云々　オホドルは、取りしまりなく亂れた樣をいふので、薄の穗のボヤけて廣がつてゐること。○かひろぎ立てる人に云々　前田夏蔭の說に、和名抄（舟車部、舟事類）に舵をカヒログと訓じ、船不安也とあるのが原義で、人の打よろぼふ樣に云ふとある。冬の枯尾花のフラフラしてゐるのを、やがて白髮の老人の、姿にも耻ぢず、人中

にヒヨロヒヨロ立ち交るのに喩へた。但し狩谷氏の箋註には、此のカヒログは、今いふカシグ（傾く）と同じだといつてあるが、是れもすてがたい。○さを鹿の云々　萬葉、卷八「我が丘にさを鹿來鳴くはつ萩の花妻とひに來鳴くさを鹿」を初として、同集以後、鹿を詠み合せた歌が多い。しかしこゝのは、後撰、秋中、貫之の「行きかへり折りてかざさむ朝な〳〵鹿立ちならす野邊の秋萩」が、引歌になつてゐる。○唐葵　本草和名に、蜀葵をカラアフヒと訓じ、催馬樂、淺緑に「前栽、秋萩、なでしこ、からほひ、しだり柳」と歌つたカラホヒは、カラアフヒの約言である。元來葵には種類が多く、今シヨクキと音で呼ぶものにも、紅黄の二種があり、紅は宿根草だけれども、黄は年々生である。而して其の性いづれも日に向ふものであるから、此の黄蜀葵と見てよいと思ふ。しかし葵中花も大きく、其の性も最も著しいのは向日葵であるから、童蒙抄以來の舊說に從ひ、さう說くのも強ちわるくはない。○岩躑躅　山に自生する赤躑躅。○折りもてぞ見る　後拾遺春下、和泉式部の「岩つゝじ折りもてぞみるせこが着し紅染のきぬに似たれば」の引用。さて同時代の人の歌を引く事については、濱臣は、此の頃は、當時の人口にある歌は、同時代の人のでもかまはなかつたといつてゐるが、さういふよりも、式部は作者の最も親しい友人ではあり、此の歌が特に氣に入つてゐたので、寧ろ其の點から出發して、此の項が書かれたと見たいと思ふ。○薔薇　萬葉にはウバラ又はウマラと詠み、古くムバラともいつたが、後轉じてイバラ、略してバラと云ふ。而して伊勢物語には「うばらからたちとも知らずして、云々」と、此の和名を用ひてゐるが、一方には、古今集、物名に貫之の「われはけさうひにぞ見つる花の色をあだなるものといふべかりけり」の如き、漢名の音を用ひたものもあり、こゝは即ち其の例である。野生のは、白色單瓣の一種だが、支那から渡つたものは、うつくしい色のもあつて愛玩された。○黑木のはし　黑木は皮つきの材木。それで造つた粗末な、而も雅味のある階。かう說くのが舊說であるが、然らばかやうな階はどこにかけられただらうか、其の邊が疑問であるから、橋と見れば無難と思ふ。だが、さすれば白樂天の詩とは、何の關係もなくなつて、それも惜しい氣がする。それで此の事に就いて、少し述べて見る。さて其の詩は、文集、卷十七、薔薇正開春酒初熟、因招劉十九、張大夫、崔二十四、同飲と題する、「甕頭竹葉經レ春熟、階底薔薇入レ夏開、似レ火淺深紅壓レ架、如レ餳氣味綠粘レ鑿、試將二詩句一相招去、倘有二風情一或可レ來、明日早花應二更好一、心期同醉二卯時杯一」といふので、此の起句の二對は、和漢朗詠、首夏の部にも引かれて、非常に有名なものであつた。隨つて菅家文草の感二殿前薔薇一一絕（東宮）と ある如き、特に殿前に栽ゑられたのも、其の影響と思はれ、更に本朝無題詩の薔薇一種當レ階綻の句にしろ、「はしのもとの薔薇も、夏を待ちがほになどして」（榮花　榮花）「はしのもとのさうび、けしきばかり咲きて、春秋の花盛りよりも、しめやかにをかしき程なるに」（源氏　帚）の如きものにしろ、架空な引用ではなく、此の事實が多く見られたのであらう。さう考へる時、淸少のもどうも、此の埒外とは斷じ兼ねる。それは此の人の好んで異を立てたのは、多く對人關係の時であり、自然の景物に對しては、頗る傳統的でもあり、時代的でもあつたから。

通釋　これに薄を入れぬのは、大層變だと人がいふでしよう。だからそれに及ぶが、秋の野の一般的な興味は薄にある。穗先が蘇枋色で大層濃いのが、朝霧にぬれて靡いてゐるのは、それほどよい物は、外にはない。秋の終になると、それが大層見所がなくなる。色々に亂れ咲いてゐた花が、殘らず散つた後、冬の末までも、頭が白く、亂雜になつてゐるのも知らないで、昔の盛時を思ひ出し

顔に、靡いてゐる。それは恰も白髮の老人が、姿にも耻ぢず、人中に立ち交つてヒヨロヒヨロしてゐるのに、ひどく似てゐる樣です。此の枯尾花をも、かういふ人と比較する事が出來て、哀とも思へるでしよう。

萩は大層色が濃く、枝がしなやかに咲いてゐるのが、朝露に沾れて、しなやかに撓がり伏してゐるのが、まことによく、而も男鹿が、特に此のあたりに來て馴れ親むといふのも、感じが格別です。唐葵は、特によいといふでもないけれども、日光に隨うて、花の傾くといふのが、一般の草木の心の樣にも思へぬので、興味がある。花の黃色は濃くはないけれども、山吹の花よりまさつてゐる。赤色の岩躑躅も、格別な事はないけれども、しかし「岩つゝじ折りもてぞ見るせこが着し紅染の色に似たれば」と、詠まれてゐるのがおもしろい。薔薇は刺があるから、接近しては、枝などはいけないけれども、面白い。雨などが晴れた後の水際や、黑木作りの風雅な階などのそばに、亂れ咲いてゐるのに、夕日のパツと照り映えた樣などは、面白い。

三百段

（一）枕草子の跋文として、名高い段である。執筆の動機と、其の內容と、これが世評とを語つてゐり、而して草子の名の出所がこゝにある事も、人のよく知る所である。

（二）伊周を「內の大臣」といつてゐるが、伊周の內大臣になつたのは、正曆五年八月で、それから三年目の長德二年四月には、太宰權帥に左遷されたのだから、其の間に書いたものであつた頃、卽ち長德元年二月の頃には、旣に一通り完成してゐたのが、ふとした事から其の人の手に由つて、流布したといふのである。しかし其の後の記事、卽ち長保元年の事まで出てゐるのだから、是れは古本の奧書にもある通り、追加の分と見なければならぬ。それはさう考へてよいと思ふ。本書はもと〳〵隨筆で、初めから計畫を立てゝ、どうまとめようなどといふ樣な、考のもとに執筆されたのではないから、同時に正曆五年八月以前の記事の多く出て來るのも、亦恐らく其の時々の日記なり隨筆なりとして、作者の手許に

【參考】古本には、「物暗うなりて、云云。これを書き果てばや」の一節がなく、而も前段とは切り離し、紙を改めて、此の草子は」と書き起してゐるから、如何にも奧書としての體裁を具へてゐる。而して是れに隨へば、其の書き始めた動機や、年代も、流布した徑路も、明瞭な事となる。卽ち正曆五年八月以後に書き出して、經房が伊勢守であつた頃、卽ち長

（三）三〇一段は、草子が流布するに至つた徑路を書いたものである。之を直譯的に、此のまま信じてよいか否かはなほ問題である。

のといふ事になる。

物暗うなりて、文字も書かれずなりたり。筆も使ひはてて、これを書き果てばや。この草紙は、目に見え心に思ふ事を、人やは見むとすると思ひて、つれづれなる里居のほどに書き集めたるを、あいなく、人の爲便なきいひ過ぐしなどしつべき所所もあれば、ようかくしたりと思ふを、心より外にこそ漏り出でにけれ。宮の御前に、內の大臣の獻り給へりし御草子を、「これに何を書かまし。上の御前には、史記といふ文を書かせ給へる」など宣はせしを、「枕にこそはし侍らめ」と申ししかば、「さば得よ」とて賜はせたりしを、怪しきを、故事や何やと、盡きせず多かる紙の數を書き盡さむとせしに、いと物覺えぬ事ぞ多かるや。大方これは、世の中のをかしき事、人のめでた

あつたもので、追記ではあるまいと思ふ。但し内大臣の獻ぜられた草子を中宮から戴くといふ事は、彼の身に取つての光榮でもあり、彼の日記なり隨筆なりにも、一轉機を來し、前のをも是れに改めて淸書するとか、前のは前のとして、筆を洗つて新に是れに書き出すとか、したのであらうと思ふ。而して此の書に奥書をつけるといふ事になれば、此の御下賜の草子といふ事に最も重點を置いて、斯樣に書くのは、是れ亦理の當然ではあるまいか。

徒然草の序に、「つれ〴〵なるまゝに、日ぐらし硯に向ひて心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそ物狂しけれ」とあるのは、兼好が先づかう書いて、次々を續けて行つたものではなく、恐らく或部分を書き終つてから、立ち戻つて心靜に考へる時に、かういふ事がいへたのだらう。此の點に於て、徒然草の序は、同時に跋であり、枕草子の跋は、又本書の序と見てもさしつかへない。而して徒然草の序は、極めて簡單な代に、かいやり樂つべきものなれば、人の見るべきにもあらず」（一九段）など、序か跋かにいふべき事を、篇中にも書き、

しなど思ふべき事、猶えり出でて、歌などをも、木、草、鳥、蟲をもいひ出だしたらばこそ、「思ふ程よりはわろし。心見つなり」とも譏られめ。唯心一つに、おのづから思ふことを、たはぶれに書きつけたれば、物に立ちまじり、人並〳〵なるべき耳をも聞くべきものかはと思ひしに、「はづかし」なども、見る人は宣ふなれば、いとあやしくぞあるや。げにそれもことわり、人のにくむをも善しといひ、褒むるをも惡しといふは、心の程こそおし量らるれ。唯人に見えけむぞ妬きや。

三百一段

左中將のいまだ伊勢守と聞えし時、里におはしたりしに、はしの方なりし疊をさし出でしかば、この草子も乘りて出でにけり。惑ひ取り入れしかども、やがてもておはして、いと久しくありてぞ返りにし。それよりありき初めたるなめりとぞ。

語釋　○史記　漢の周馬遷の撰。上は五帝より、下は漢の武帝に至る歷史。本紀十二、表十、書八、世家三十、列傳七十、すべて一百三十篇、紀傳體の史書の始祖。○枕にこそは云々　身邊に置く、雜記帳に致しましようの義。枕草子の語については、總說中に詳說した。○物覺えぬ事ぞ云々　我が身ながら、たわいもなき事を澤山書いてしまつたワと云ふ。○心見つなり　淸少の心底もわかつたと惡口する。○人並々なる耳をも云々　時々の思ひ付を、何といふ譯もなく書いたものだから、普通の書物並の評言を受ける筈のものでもないと思つてゐた。○はづかしなども云々　思ひきつて書いてあるから。○左中將の云々　此の一小段は、春註本にはなく、且これは或人の奥書だといつてゐるが、古本には、前段と一つゞきになつてゐるから、今は是れに從つた。而して此の左中將は古本の奥書に、源經房と爲し、其の官歷を擧げ、經房の伊勢權守は長德元年二年の事である、此の草子に、長保元年二年の事を多く書いてあるのは、或は書き加へたものかと、疑つてゐる。經房は濟政と對に、書中しば〳〵出てゐる人で、西宮左大臣高明の四男、長德元年正月に、左近少將で伊勢權守を兼ね同二年七月、右近權中將に進み、同三年正月、備中守を兼ね、同四年十月に左近權中將に轉じた。（公卿補任に據る）隨つて此の人の伊勢守であつたのは、長德元年正月から滿二年間。左中將になつたのは同四年十月だから、此の段を書いたのは其の以後で、前の段よりは少くとも二年半は後の事になる。一〇疊　タヽミはもと敷物の總稱。薦も筵もタヽミと云ひ、敷物用の薦をタヽミゴモとも云つた。卷きたゝむよりの稱であらう。中古の所謂タヽミは、莫蓙に緣をつけたもので、大小長短の別あり、後世の薄緣に當る。此の外になほ、床をつけた厚疊もあつた。

通釋　暗くなつて、文字も書かれぬ樣になつてしまひました。此の筆も使ひきつて、之を書いて

自分の性質の小さかしかつた事を、跋がはりに終段に書いた。清少は是等を併せて、跋を跋らしく書いたといふまで。だが中にだつて、無論同じ事もいつてゐる。現に「げに書き出で、人の見るべき事にはあらねど、此の草子を見るべきものと思はざりしかば、怪しき事をも、憎き事をも、唯思ひむ事の限りを、書かむとてありしなり」（二二二段「とり所なきもの」の如きは、卽ちそれである。土佐日記は短篇でもあり、統一のある一部の紀行だから、「とまれかうまれ疾く破りてむ」で、立派に結びがついた。隨筆は一

しまひたいと思ふが、ちとむつかしい。抑も此の草紙は、目に見えたり、心に思つたりする事を、人が見やすまいと思つて、退屈な自邸籠りの間に書き集めて置いたのですが、具合のわるい、人の爲に不都合ないひ過しなどをしてしまつてゐる樣な所々もあるから、よう醫しておいたと思ふのに、意外な事にも、他に漏れたのです。或時宮樣の御前に、內大臣殿が紙本を獻上されたが、宮樣は、「是れに何を書かうか。主上は史記といふ書物を、お書きになるが」などゝ仰せられたから、私は、「手元のひかへ帳にいたしましよう」と申したら、宮樣は、「そんならばあげよう」といつて下さつたのを、變な故事だとか、何だとか、いくらも〳〵澤山ある紙の數を、書き盡さうとしたので、大層たわいもない事が多くなりましたワ。全體これは世上の面白い事とか、人が結構だと思ふ樣な事のそれを、今一段と選び拔いて、歌などをも附け加へて、木草鳥蟲などの景物をも描寫したのなら、之を見る人が、「思つた程よりは出來がわるい。あの人の心の程もわかつた」との譏りも受けようが、是れはさういふ譯の物ではない。唯自分の心だけで、自然浮んで來る感想を、戲に書きつけたのだから、他の書物の中に交つて、尋常一般の批評を受ける筈のものでないと思つてゐましたが、之を見る人が、「恥かしい」（ひどく書かれてゐるので）などゝもいはれるから、大層變なものですワ。成程考へて見れば、それも其の筈です。人の憎むのは、善いといひ、人が譽めるのをば、惡いと云ふ私ですから、ひねくれてゐる心の程も、推量される譯です。何にしろ唯、人に見られたのが憎らしい事ですワ。

三百一段

數段なりが立したものであるから、隨所に同じ事が繰り返されるのも、亦當然である。

いづれにせよ、序跋は其の書の成立なり內容なりの大體を知るのに、便宜があるものであるから、是れの附加した書は、必ず先づ是れから讀むべきものである。枕草子の此の跋文は、曾て本試驗に出た事があるが、今鏡、新古今集などの序文も、亦出題された事のあるのを記憶する。

左中將經房がまだ伊勢守と申された時、私の宅においでになりましたので、端の方にあつた、數物の瀧緣（たきべり）をさし出しました所が、此の草子も其の上に乘つて出てしまひました。それで私は、あわてゝ取り込みましたけれども、事既におそく、中將は其のまゝ持つてお歸りになつて、大層時がたつて、其の草子が返りました。兎に角此の本は、それからあちこちと、廣がつて行つたのです。

通解はわかり易い樣に、原文にはない文句までを補ひ、且宮中關係の事ではあり、女の文のやさしみをも出す爲に、敬語のつかない所の文にまで、敬語を入れて解いて見た。なほ又、解釋した段は少いけれども、觸れた段は相當多いつもりである。讀者は其の點に注意し、原本と照し合せて、精讀せられむ事を望むのである。

總說一〇頁系圖の超子と懷子とが、入れちがひになつてゐる事に氣付いたから、こゝにお斷りをして置きます。

5/2936
元

716
96

終